

たか　しま　い　せき
高　島　遺　跡　（2次調査）

福岡県八女市大字津江字高島所在遺跡の調査報告

八女市文化財調査報告書 第63集

2001

八女市教育委員会

序

古来より、自然豊かな地であった八女市域には、先人達の足跡を示す多くの文化財が各所に残されています。

中でも星野川と矢部川との合流地点の右岸に位置する津江地区は、弥生時代の中頃を中心とした遺跡が数多く埋蔵されている地域としてよく知られています。

さて、今回調査を行った津江地区は市の中心街や、九州を縦断する国道3号線が近くにあり、また、八女地域の主要道路である国道442号線に面していることから、以前より各種開発が盛んに行われています。

このような状況の中、同地域の一面に医療法人社団慶仁会による川崎病院新病棟建設計画があがり、八女市教育委員会では事前に発掘調査を行い、記録上での保存を目的として調査いたしました。

発掘調査の結果、紀元前二世紀頃にさかのぼる弥生時代の米作りである稲作が、既に定着していた事を示す稲穂の跡がついた圧痕土器が出土し、また、稲作と同時に畑作物も栽培していた証となる豆類の圧痕土器も同時に見つかり、八女地区での農業の始まりと展開を考える上で、大変貴重な発見であったと言えます。

本書は、弥生時代の先人達の記録を一部収録したものにすぎませんが、本書が皆様方の埋蔵文化財に対する認識とご理解につながり、さらには学術研究上においても役立つことが出来れば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査に関し多大なご理解とご協力をいただきました医療法人社団慶仁会 理事長 川崎正章様をはじめ、川崎病院の関係者の皆様方、そして発掘作業に従事していただいた作業員の方々、そして調査報告書などの作成にかかわった多くの方々に対し、心から感謝の意を表する次第であります。

平成13年3月30日

八女市教育委員会
教育長 樋口 欽 一

例 言

- 1 本書は、川崎病院新築工事に伴い、医療法人 社団 慶仁会 理事長 川崎正章の委託を受けて八女市教育委員会が発掘調査を実施した八女市大字津江に所在する高島遺跡の弥生時代を中心とした生活遺構についての発掘調査報告書である。
- 2 本調査区南側隣接地において、八女市教育委員会が平成8年度に発掘調査を行っており、今回の調査は2次調査となる。
- 3 発掘調査で検出した各遺構は、その種類ごとに記号を付し、竪穴住居をSB、溝遺構をSD、土塋をSK、ビットをSP、不明遺構をSXと表記した。
- 4 本書に使用した遺構実測図の作成は、国土地理院の設定する第Ⅱ座標系を基準とし、調査担当者の他に調査補助員、及び、作業員で行った。出土遺物の実測は、岩戸山歴史資料館において行った。
- 5 本書に使用した図面類の整図及び製図は岩戸山歴史資料館において行った。
- 6 本書に使用した写真は、空中写真を有限会社 空中写真企画に。又、土質分析用写真を応用地質株式会社に依頼し、他を大塚恵治、山本義輝が撮影を行った。
- 7 本書に使用した方位は、全て磁北である。
- 8 本書の執筆は、Vを応用地質株式会社の松山氏が行い、その他を大塚が行った。又、本書の編集は大塚が担当した。
- 9 本書に関する調査記録、及び、出土遺物類は、八女市・岩戸山歴史資料館において保管、収蔵している。

本文目次

I はじめに	1
II 遺跡の立地と歴史的環境	3
III 発掘調査の概要	8
IV 遺構と遺物	8
1 竪穴住居 (SB)	8
2 溝 (SD)	11
3 土 塋 (SK)	17
(1) 貯蔵穴状土塋	17
(2) 取水土塋	19
(3) その他の土塋	27
4 ビット (SP) 出土の遺物	31
5 その他の遺物	32
V 土質分析結果報告	33
VI まとめ	39
1, 取水土塋について	39
2, 圧痕土器について	42
3, おわりに	43

挿 図 目 次

第 1 図	高島遺跡周辺の遺跡分布図 [1/25,000]	4
第 2 図	高島遺跡 (2次調査) 位置図 [1/2,500]	6
第 3 図	高島遺跡 (2次調査) 遺構配置図 [1/300]	7
第 4 図	SB-01 遺構実測図 [1/60]	9
第 5 図	SB-01 出土土器実測図 [1/3]	10
第 6 図	SB-01 出土石器実測図 [1/2]	10
第 7 図	SB-02 遺構実測図 [1/60]	11
第 8 図	SB-03 遺構実測図 [1/60]	11
第 9 図	SD-01 と取水土壌群 [1/100]	12
第 10 図	SD-01 出土土器実測図 [1/3]	14
第 11 図	SD-01 出土石鏃実測図 [2/3]	15
第 12 図	SD-02 出土土器実測図 [1/3]	16
第 13 図	SK-01 (貯蔵穴状土壌) 遺構実測図 [1/40]	17
第 14 図	SK-01 (貯蔵穴状土壌) 出土土器実測図 [1/3]	18
第 15 図	SK-02 遺構実測図 [1/40]	18
第 16 図	SK-03 遺構実測図 [1/40]	19
第 17 図	SK-04 遺構実測図 [1/40]	19
第 18 図	SK-05 遺構実測図 [1/40]	19
第 19 図	SK-06 遺構実測図 [1/40]	20
第 20 図	SK-07 遺構実測図 [1/40]	20
第 21 図	SK-08 遺構実測図 [1/40]	20
第 22 図	SK-09 遺構実測図 [1/40]	21
第 23 図	SK-10 遺構実測図 [1/40]	21
第 24 図	SK-11 遺構実測図 [1/40]	21
第 25 図	SK-12 遺構実測図 [1/40]	22
第 26 図	SK-13 遺構実測図 [1/40]	22
第 27 図	SK-14・SP-01 遺構実測図 [1/40]	22
第 28 図	SK-14 出土黒曜石原石実測図 [2/3]	23
第 29 図	SK-15 遺構実測図 [1/40]	23
第 30 図	SK-16 遺構実測図 [1/40]	23
第 31 図	SK-21 遺構実測図 [1/40]	24
第 32 図	SK-22 遺構実測図 [1/40]	24
第 33 図	SK-35 遺構実測図 [1/40]	24
第 34 図	SK-39 遺構実測図 [1/40]	24
第 35 図	取水土壌 (SK-03, 04, 21, 39) 出土土器実測図 [1/3]	25
第 36 図	SK-17 遺構実測図 [1/40]	26
第 37 図	SK-17 出土砥石実測図 [2/3]	26
第 38 図	その他の土壌 (SK) 出土土器実測図 [1/3]	27
第 39 図	SK-34 遺構実測図 [1/40]	28
第 40 図	SP-02 遺構実測図 [1/20]	29
第 41 図	SP-02 出土砥石実測図 [1/3]	29
第 42 図	ビット (SP) 出土土器実測図 [1/3]	30
第 43 図	排土中出土 管状土製品実測図 [2/3]	31
第 44 図	SK-04・SD-01 土層断面図 [1/40]	39
第 45 図	SK-05・SD-01 土層断面図 [1/40]	39
第 46 図	SK-07・SD-01 土層断面図 [1/40]	39

表 目 次

表 1	取水土壌一覽表	4 0
表 2	竪穴住居一覽表	4 1
表 3	八女市内出土の炭化米及び縄文土器一覽表	4 2

図 版 目 次

PL 1	1. 高島遺跡 (2次調査) 発掘調査前風景 (南東より)	4 7
	2. 高島遺跡 (2次調査) 第1期調査区全景	4 7
PL 2	1. SB-01全景 (北東より)	4 8
	2. SB-01主柱穴検出時埋土状況 (南より)	4 8
PL 3	1. SB-02全景 (南より)	4 9
	2. SB-03全景 (南東より)	4 9
PL 4	1. SB-03土層断面 (北より)	5 0
	2. SB-03土層断面 (南より)	5 0
PL 5	1. SD-01と取水土壌群	5 1
	2. SD-01土層断面 (南より)	5 2
PL 6	1. SD-02全景 (東より)	5 2
	2. SD-02土層断面 (東より)	5 2
PL 7	1. SK-01 (貯蔵穴状土壌) 全景 (北より)	5 3
	2. SK-01南辺 挟り部分	5 3
PL 8	1. SK-02、03、04、05完掘状況 (東より)	5 4
	2. SK-03 板状痕跡	5 4
PL 9	1. SD-01内石材とSK-03 (奥)、04 (手前)	5 5
	2. SK-05 トンネル状排水口	5 5
PL 10	1. SD-01内石材とSK-07 (西より)	5 6
	2. SD-01~SK-08土層断面 (南より)	5 6
PL 11	1. SD-01とSK-08	5 7
	2. SK-12 排水口掘削前状況 (東より)	5 7
PL 12	1. SK-14土層断面 (南より)	5 8
	2. SK-16検出状況 (南西より)	5 8
PL 13	1. SK-35、39状況 (南より)	5 9
	2. SK-35 止水用石材検出状況	5 9
PL 14	1. SK-39内 土器出土状況	6 0
	2. SK-17床面検出状況 (東より)	6 0
PL 15	1. SK-34完掘状況 (北東より)	6 1
	2. SK-34土層断面 (南より)	6 1
PL 16	1. SP-02 礫石出土状況 (南東より)	6 2
	2. SP-53 土器出土状況 (南より)	6 2
PL 17	SB-01、SD-01出土遺物	6 3
PL 18	SD-01、SD-02出土遺物	6 4
PL 19	貯蔵穴状土壌 (SK-01)、取水土壌 (SK-03) 出土遺物	6 5
PL 20	取水土壌 (SK-03、04、14、39) 出土遺物	6 6
PL 21	その他の土壌出土遺物	6 7
	その他の遺物	6 7
	ビット (SP) 出土遺物	6 7

I はじめに

医療法人 社団 慶仁会 理事長 川崎正章より、平成11年3月2日付の川崎病院現病棟にかかわる新病棟建設に伴う発掘の届出（文化財保護法第57条の2第1項に基づく）が提出された。

これを受けた八女市教育委員会は、直ちに慶仁会及び川崎病院関係者と協議し、対象地が平成8年度に調査した高島遺跡（1次調査）に隣接しており、その当時検出されていた旧河川（SD-01）の延長部分が今回の対象地内に北進している事などから、地下に遺跡が包蔵されている可能性が極めて高い旨を伝え、その保存対策については随時協議する事となった。その結果、新病棟建設部分を2区画に分け、東側を第1期、西側を第2期調査区として発掘調査を実施し、記録に留める事となった。

その後、平成11年4月16日付で埋蔵文化財発掘調査依頼が提出され、同年4月20日付で埋蔵文化財発掘調査に係わる協定書及び委託契約書を交わし、同日付で発掘調査を行い、次年度において発掘調査報告書を刊行する事となった。

調査はまず、バックホーにより東側の第1期調査区の表土除去を行い、第2期調査区を含む周辺に排土を仮置きしながら遺構の検出を行った。検出当初、平成8年度調査分の旧河川（SD-01）が直下で出現するものと予想していたが、1期区内では検出できなかった為、大きく西方に蛇行していると考えられた。これとは別に、調査区内を南北に貫き、枝状状に方形土壌を多数連ねた溝（SD-01）が検出され、その内容説明から着手する事とした。

調査期間中、例年にない大雨やそれによる冠水、そして地下からの多量の湧水等に悩まされ、作業は著しく効率下がりが、多くの手間と時間を費やせざるを得なかった。

調査関係者は以下の通りである。

平成11年度

医療法人 社団 慶仁会 理事長 川崎正章

八女市教育委員会

教 育 長	樋口 欽一
教 育 部 長	石松 憲治
生涯学習課長	大隈 繁敏
生涯学習課長補佐	志岐 徳
文化財係長	赤崎 敏男
同 係 員	中川寿賀子
同 係 員	森田 尚美
同 係 員	大塚 恵治（調査担当）
同 嘱 託	山田 朗子
調査補助員	山本 義輝

平成12年度

医療法人 社団 慶仁会 理事長 川崎正章

八女市教育委員会

教 育 長	樋口 欽一
教 育 部 長	石松 憲治
生涯学習課長	諸富 和生

生涯学習課長補佐	志岐 徳
文化財係長	赤崎 敏男
同 係 員	中川寿賀子
同 係 員	大塚 恵治（調査担当）
同 嘱 託	山田 朗子

なお、本調査にあたり、医療法人 社団 慶仁会 理事長 川崎正章様をはじめとし、川崎病院事務次長 石橋様や事務局の方々、川崎病院及びビハラー光風の関係各位、地元町内の方々には多大なるご配慮とご協力を受けました。

また、以下の方々には並々ならぬ御指導、御教示を受けた。記して感謝の意を表します。

佐々木隆彦、伊崎俊秋（福岡県教育委員会）、吉留秀敏（福岡市教育委員会）、小田和利（南筑後教育事務所）、山田元樹（大牟田市教育委員会）、永見秀徳、小林勇作、上村英士、柴田剛（筑後市教育委員会）、永田寧（立花町教育委員会）

II 遺跡の立地と歴史的環境

〔地理的環境〕

高島遺跡は、福岡県八女市大字津江字高島に所在し、標高約35m程の低位の段丘上に位置している。国道442号線沿いには大規模小売店舗を中心に各種小売店舗がひしめきあうように軒を並べているものの、他方、国道南側一帯は日本の原風景とも言える実り豊かな田畑が広範囲に広がっており、押し寄せる都市化の波の中、八女の古風景の面影を今に良く残している。

八女市は福岡県の南部地区に所在し、西に筑後市、東に上陽・黒木町、北に広川町、南に立花・瀬高町と、一市五町と境を接し、主に農業を主要産業としている。その立地は、耳納山地南緩斜面より西に延びる八女丘陵と、福岡・熊本両県を区する筑肥山地により「コ」の字形に囲まれ、福岡・大分の県境に立地する釈迦岳山地に源を発し、黒木盆地を経て平野部を西流する矢部川によって形成された扇状地にある。

市内には国道442号線や国道3号線、九州縦貫自動車道などの主要幹線道路が貫いており、八女地方における交通の要衝となっている。特に八女インターチェンジ周辺は鶴地第2工業団地などの造成事業に係る企業立地が盛んに行われており、今後更に八女地方の交通・物流事情は大きく変化し、その重要性はこれまで以上に増加してゆく事が予想される。

〔歴史的環境〕

近年、八女市においては圃場整備事業や各種の開発等により、新たな知見が次々に確認されている。高島遺跡周辺においてもそれは例外ではなく、各種開発に伴って埋蔵文化財の発掘調査例も増加している。以下、津江地区周辺の主だった遺跡を概観してみる。

地区周辺の歴史は古く、その始まりは縄文時代早期に遡る。県営担い手育成基盤整備事業地内における尺取遺跡(註1)では、早期末の押型文土器が多量に出土している。山形文等は個体数が非常に少なく、楕円文が圧倒的な数に有利にある事は、当地方の特異性を示唆している。弥生時代に入ると、低位段丘面や微高地上に遺跡が増加してゆく。平成3年度に行った熊野遺跡(註2)の一次調査で、弥生時代中・後期の堅穴住居、貯蔵穴、溝、環濠、木棺や甕棺、石棺を主体とした墳墓群が検出されている。墳墓群や堅穴住居、溝等からの極立った出土遺物は確認出来なかったものの、多量の土器が出土した。平成8年度の二次調査(註3)の結果ともあわせて、周辺に大規模な弥生集落が存在するのは間違いなく、平成2年度に調査が行われた赤氏遺跡(註4)や、平成6年度に調査が行われた平田・六反田遺跡(註5)、北ノ前遺跡(註6)、野内遺跡(註7)からは堅穴住居群、掘立柱建物群、墳墓群が検出され、また、西原遺跡(註8、9)からは総数80基を越える甕棺墓や外来系土器を多量に出土した方形周溝墓等の検出があり、これらを裏付けるものとして注目できる。古墳時代に入ると、周辺では前述の遺跡以外に高野町遺跡(註10)や鍛冶屋遺跡(註11)、南中学校校庭遺跡などで比較的多量に集落跡が見つかっている。中でも南中学校校庭遺跡の11号堅穴住居(SB-11)からは、多種多様な土器群と共に多量のミニチュア土器や、辻金具付の用具が出土するなど、通常の集落を形成する一戸の住居跡とは明らかに内容が異なっており、注目に値する。

参考文献

註 1 「県営担い手育成基盤整備事業 八女東部地区埋蔵文化財発掘調査概報2」

八女市文化財調査報告書 第45集

註 2 「熊野遺跡」

八女市文化財調査報告書 第26集

註 3 「熊野遺跡2」

八女市文化財調査報告書 第49集

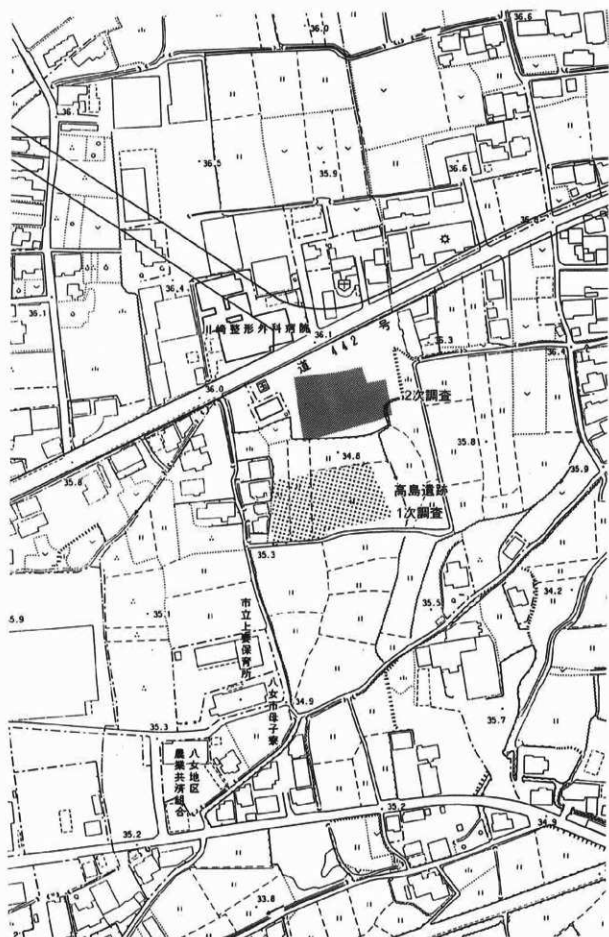
註 4 「赤氏遺跡」

八女市文化財調査報告書 第20集

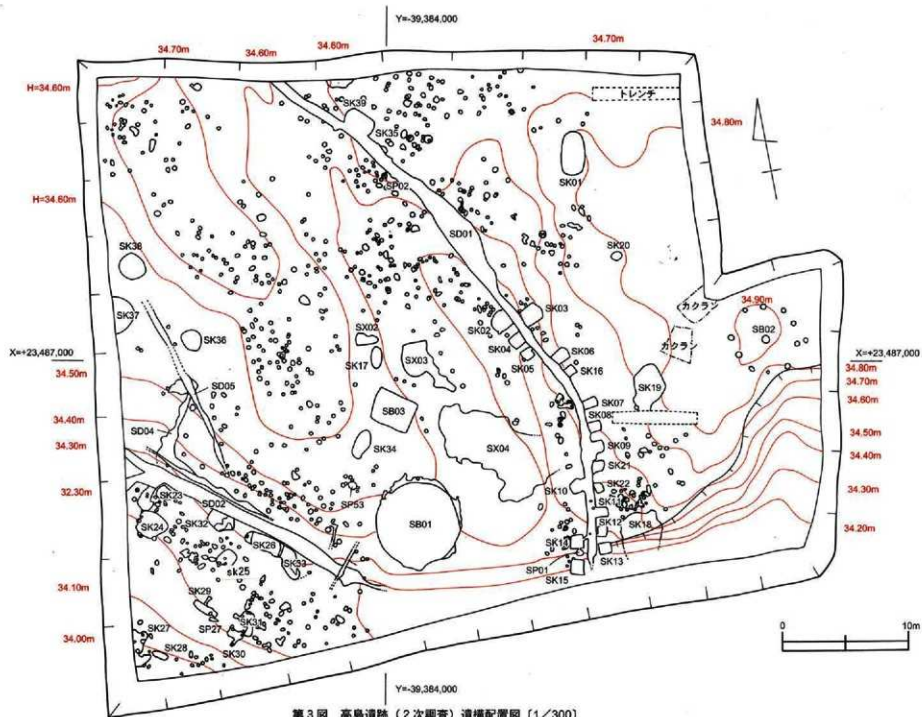


- 1.岩戸山古墳 2.乗場古墳 3.辻の西遺跡 4.宅間田古墳群 5.善藏塚古墳 6.丸山塚古墳 7.茶臼塚古墳 8.鶴見山古墳
 9.鶴見山南・太神宮古墳 10~14.釘崎古墳群 15.一念寺古墳群 16.鹿子島山古墳群 17.本古墳群 18.立山山古墳群
 19.丸山古墳 20.中尾谷遺跡 21.立山山道輪窓跡 22.長峰地区条里 23.官田地区条里 24.道手遺跡 25.福島高校遺跡
 26.宅間田遺跡 27.福島城跡 28.福島中学校校庭遺跡 29.本向野遺跡 30.純土塚石棺・本町遺跡 31.赤氏遺跡 32.万上田遺跡
 33.南中学校校庭遺跡 34.熊野遺跡 35.高島遺跡 36.後ノ江遺跡 37.鍛冶屋遺跡 38.津ノ江遺跡 39.白石遺跡 40.高野町遺跡
 41.松ノ本遺跡 42.島田遺跡・長田遺跡 43.アモノ遺跡 44.茶ノ木ノ本遺跡 45.匡伏遺跡 46.平田・穴反田遺跡
 47.北ノ首遺跡 48.野内遺跡 49.野田遺跡 50.枕林遺跡 51.丁ノ坪遺跡 52.水尾遺跡 53.千松遺跡 54.尺取遺跡
 55.口ノ坪遺跡 56.大門遺跡 57.石仏遺跡 58.大林遺跡 59.十郎丸遺跡 60.野ノ内遺跡 61.春田遺跡 62.西原遺跡
 63.柳ノ内遺跡 64.八反田遺跡。

第1図 高島遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 高島遺跡（2次調査）位置図（1/2,500）



第3図 高島遺跡（2次調査）遺構配置図（1/300）

Ⅲ 発掘調査の概要

発掘調査は、開発区域内の新病棟建設予定地3, 200㎡を対象とした。予定地が病院専用の駐車場として使用されていた為、調査区を2分し、東側を第1期調査、西側を第2期調査として駐車場利用者に配慮する事とした。

〔第1期の調査〕

調査面積の約6割に相当する部分を第1期とした。バックフォーにより駐車場アスファルト、及びバラスを除去し、遺構面を覆う水田耕作土を慎重に外した後、人力による遺構の検出を始めた。その結果、円形堅穴住居2軒、方形堅穴住居1軒、溝1条、土壇20基（後に判明した取水土壇、貯蔵穴状土壇を含む）、堅穴土壇2基、不明遺構4基（内1基のSX-01は砂礫状台地の一部と判明）等を検出した。堅穴土壇や不明遺構を除き、その大半が弥生時代中期前半から中頃に属するもので、これに後続する遺構は見られなかった。

この年、北部九州は例年がない程雨が多く、調査区が水没し、長く調査を中止せざるを得ない期間があったものの、9月22日をもって第1期の調査は終了した。

〔第2期の調査〕

調査面積の約4割に相当する部分を第2期とした。2期調査は1期調査終了後直ちに着手し、まず2期調査区上に仮置きした1期調査分の廃土をバックフォーにより1期調査区内に流し込み、そこから2期分の掘削を始めた。掘削手順は第1期調査と同様で、その後人力による遺構の検出を行った。その結果、新たに土壇14基、溝4条（SD-03は後に溝でない事が判明し、欠番とした）、堅穴土壇3基等を検出した。1期調査時のような天候不順に見舞われる事もなく、作業は順調に進み、11月14日に行った発掘現場説明会をもって、6ヶ月もの長期間続いた発掘作業は完結を見た。

以上概要を述べたが、本文中では第1期・第2期分を一括して報告する。以下各遺構についての説明を行う。

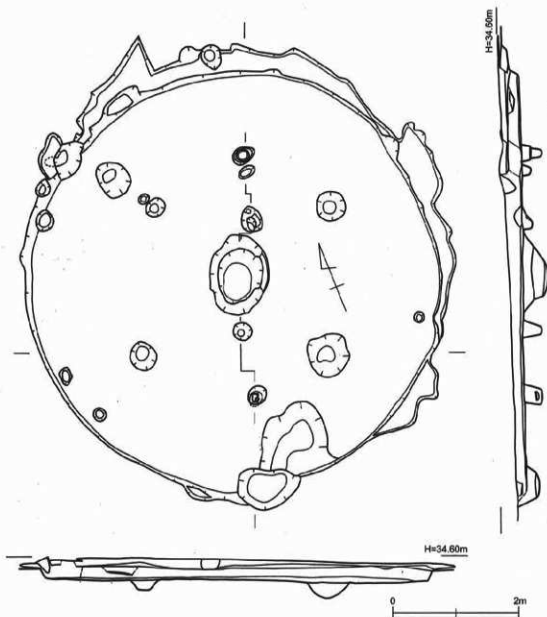
Ⅳ 遺構と遺物

1 堅穴住居（SB）

今回の調査では3基の堅穴住居を検出した。そのうちSB-02は、削平が著しく壁面が全て遺存していなかった為、規模等についての詳細なデータは得られなかった。SB-03については今回方形の堅穴住居としたが、炉が存在しない事や柱穴が脆弱な事から、方形土壇の可能性も捨て切れない。

SB-01（第4図）

調査区中央部南側で検出した、円形の堅穴住居である。規模は直径7～7.6m、深さ0.3mを測る。主柱4本、支柱2本の6本柱と考えられる。貼り床は認められない。北西側の主柱、及び、支柱2本に立て替えた痕跡があり、少なくとも一回以上、建て直しを行っている。炉内は深いが、炭化物や焼土の痕跡は見つからなかった。出土遺物として弥生土器の甕、壺、安山岩製スクレイパー、黒曜石製石鏃などがある。

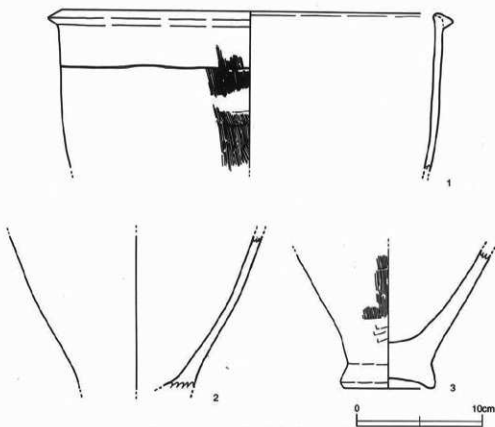


第4図 SB-01遺構実測図〔1/60〕

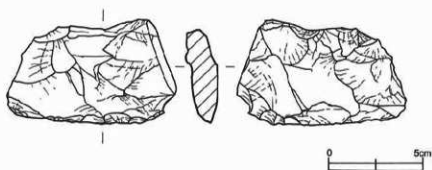
出土遺物

土器（第5図）

1は甕の胴部～口縁部の破片で、胴部中ほどでやや内湾しつつ上半で直線的に延びた後、直立気味の口縁を形成する。口縁端部にはやや厚手で断面三角形の突帯を貼り付け、垂下気味に仕上げる。口縁部下には不明瞭な沈線が一条巡る。胎土には砂粒を多量に含み、器面は荒い。焼成は良好で、一部に黒斑が見られる。外面は淡茶色～暗茶色、内面は淡茶灰色を呈す。内面はナデ、外面は細かいハケ調整を行う。復原口径32.0cmを測る。2は甕の胴部下半の破片で、斜め外方に直線的に延びる。胎土には多くの砂粒を含み、一部には黒雲母片も認められる。器面は非常に荒く、下半部には黒斑と共に焼成時の破裂痕も見られる。焼成はやや不良で、全体的に赤味がかった。内面は淡茶灰色、外面は暗赤褐色を呈す。内面はナデ調整、外面は細かいハケ調整を施す。3は甕の底部～胴部下半の破片で、やや外方に張り出した裾部から、短い脚部を介し直線気味に延びる胴部下半に至る。浅い上



第5図 SB-01出土土器実測図〔1/3〕



第6図 SB-01出土石器実測図〔1/2〕

げ底を呈し、非常に厚みがある。裾端部の接地面はやや狭いが、安定感は大い。胎土には片岩系鉱物や長石などの砂粒を多く含むが、器面は比較的滑らかである。やや赤味がかったが焼成は良好で、内面は淡黒茶色、外面は黄茶色～淡赤褐色を呈す。外面にハケ後ナデ調整を施す。

石器（第6図）

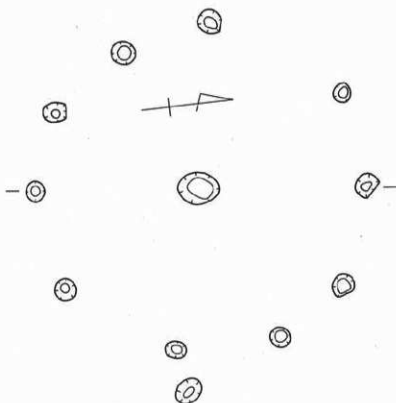
1はサヌカイト製のスクレイパーで、扁平な剥片の長辺片側に、両面加工により刃部を形成している。長さ9.0cm、幅5.5cm、厚さ1.5cmを測る。

SB-02（第7図）

調査区東部で検出した、円形の竪穴住居である。削平著しく、壁面は全く遺存していない。砂礫土の上に立地しており、検出時の床面は安定に欠ける。規模は直径5.6m±を測る。主柱10本を配し、中央に炉を設ける。貼り床は確認出来なかった。出土遺物として黒曜石剥片が十数点ある。

SB-03 (第8図)

調査区中央部で検出した、方形の竪穴住居である。規模も比較的小型で、中央に炉等の施設がない為、方形土壌の可能性も捨て切れない。規模は長軸長3.2m、短軸長2.0m、深さ0.45mを測る。主柱は2本で、各長辺の中央に付く。貼り床は認められなかった。出土遺物として弥生土器の甕があるが、細片であったため図示していない。



2 溝 (SD)

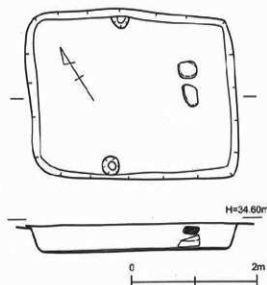
今回の調査では4条の溝を検出した。溝相互間の規格性は見受けられず、様々な時期の溝が混在しているものと考えられる。ただ、後世の削平は予想以上で、時期が確定出来たのは4条中2条 (SD-01、02) にとどまった。



第7図 SB-02遺構実測図 (1/60)

SD-01 (第9図)

調査区のほぼ中央を北西から南東に向かって流路をとる溝で、途中19基の取水土壌がクシの歯状に並ぶ。標高を見ると北端で34.25m、中央部で34.04m、南端で34.20mとなっており、水位が極端に下がった時などは中央部分に水が集まるようになっている。また、中央のやや北側に溝が一部広がった部分がある。溝壁面の大半がほぼ垂直に立っているのに対し、この部分のみ緩斜面が形成されている。人為的構造か否かについては判然としない。規模は検出長4.8m、幅0.7m~1.0m (緩斜面部分の幅は最大で2.20m)、深さ0.1m~0.35mを測る。出土遺物として、弥生土器の甕、壺類や黒曜石剥片等がある。

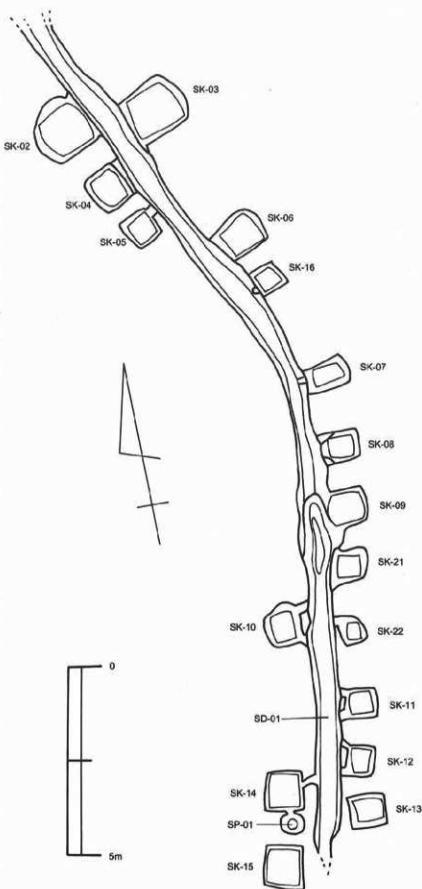


第8図 SB-03遺構実測図 (1/60)

出土遺物

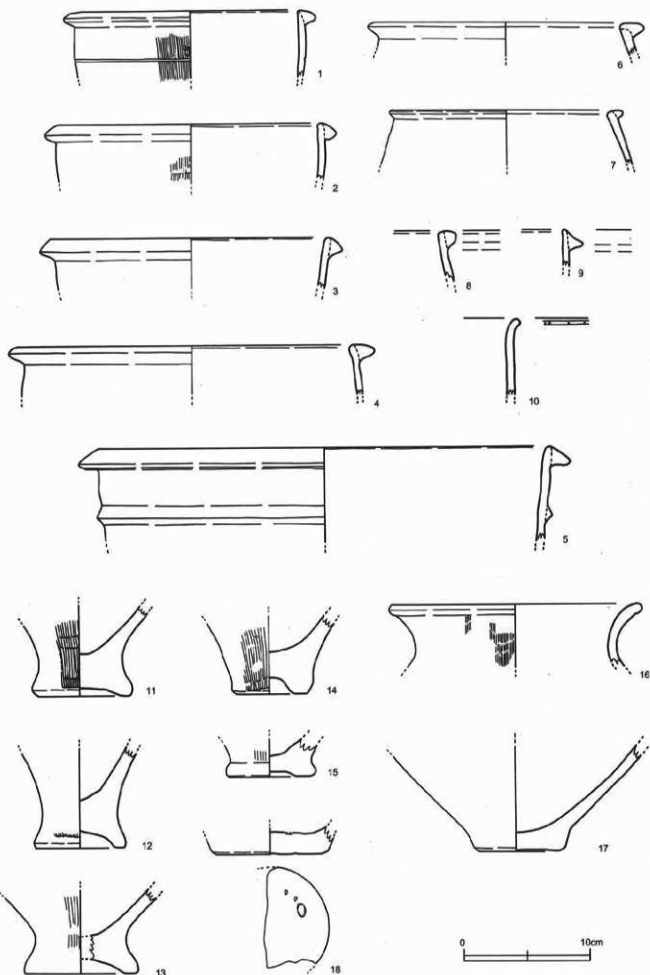
土器（第10図）

1～10は甕である。10を除く全てが突帯文土器の系譜を受けるもので、口縁部や胴部に貼付の突帯を施している。1は甕の胴部～口縁部の破片で、膨らみ気味の胴部からやや内湾気味の口縁が形成される。口縁端部には突帯を貼り付け、口縁端部を垂下気味に仕上げる。頸部付近には器面調整後に施された明瞭な沈線が一条見られる。胎土には長石や黒雲母を主体とした砂粒を少量含んではいるが、器面は非常に滑らかである。焼成は良好で、外面は茶灰色、内面は暗褐色～暗茶灰色を呈す。外面はやや荒いハケ、内面はナデ調整を施す。口縁部上端面にはハケ調整が見られる。復原口径20.0cmを測る。2は甕の胴部上半～口縁部の破片で、膨らみ気味の胴部からわずかに内湾した口縁が形成される。口縁端部には1とともに台形気味の突帯を貼り付け、口縁端部を垂下気味に仕上げる。頸部付近に不明瞭な沈線が一条見られる。胎土には長石を主体とした砂粒を多く含む。焼成は良好だが、全体的に赤味がかった。内外面とも淡赤褐色を呈し、外面はハケ、内面はナデ調整を施す。復原口径23.



第9図 SD-01と取水土壌群〔1/100〕

0 cmを測る。3は甕の胴部上半～口縁部の破片で、外方に直線的に延びた胴部上半よりそのまま口縁部が形成される。口縁端部には断面三角形の突帯を貼り付け、口縁部を垂下させる。胎土には片岩系の鉱物を主体とした砂粒が多く含まれるが、器面は比較的滑らかである。焼成は良好で、内外面とも暗茶色～淡黒茶色を呈す。調整は内面がナデ仕上げで外面は不明であるが、突帯接合部分については不完全にヨコナデ仕上げをしており、接合状態が明瞭に見てとれる。復原口径24.0 cmを測る。4は甕の胴部上半～口縁部の破片で、膨らみ気味の胴部から内湾気味の口縁部が形成される。口縁端部にはやや長めの突帯を付けた後、それを覆い隠すように粘土を貼り付け、突帯を形成しており、やや煩雑な製作工程を経ている。胎土には細砂粒が多く含まれるが、器面は平滑である。焼成は非常に良好で、内外面とも暗茶褐色～暗茶色を呈す。口縁端部と胴部外面の一部に黒斑が見られる。調整は内外面ともにナデ調整を施す。復原口径29.0 cmを測る。5は甕の胴部上半～口縁部の破片で、直線的に延びる胴部から、そのまま直立気味の口縁部が形成される。口縁端部には長めの突帯を、胴部には断面三角形の短い突帯を貼る。口縁部突帯の端部下には明瞭な沈線が一条見られる。この突帯も、小さな突帯を貼付後、粘土で被覆・調整し長い突帯を形成する二重構造を成している。胎土には砂粒を多く含み、器面はやや荒い。焼成は良好で、外面は淡茶灰色、内面は淡暗茶色を呈す。胴部突帯下に黒斑が見られる。内外面ともにナデ仕上げであるが、口縁部上端面ではヨコナデ後に放射状にナデを施すなど、丁寧な作りとなっている。復原口径39.0 cmを測る。6は甕の口縁部の破片で、内湾気味の口縁に垂下気味の突帯を貼る。胎土には、長石・雲母片岩・黒雲母を主体とした砂粒を多く含み、器面は非常に荒い。焼成もやや悪く、全体的に赤褐色気味である。内外面ともナデを施していると見られるが、あまり判然としなない。復原口径22.0 cmを測る。7は甕の胴部上半～口縁部破片で、膨らみ気味の胴部からやや内湾した口縁が形成される。口縁端部には垂下気味の短い突帯を貼る。胴部外面と突帯接合部の一部に煤が付着しており、煮炊きに使用されていたと思われる。胎土には砂粒を多く含み、器面はやや荒い。焼成はやや悪く、若干軟質気味である。色調は外面が淡黒茶色、内面は淡茶灰色を呈す。内面はナデ調整を施しているが、外面は不明。復原口径18.6 cmを測る。8は甕の口縁部の破片で、内傾し直線的に延びる胴部から、そのまま口縁が形成される。口縁端部には、断面台形の突帯が貼られ突帯下の頸部付近には、明瞭な沈線が一条見られる。胎土には細砂粒を若干含むが、器面は非常に滑らかに仕上げられている。焼成は良好で、外面は白灰色、内面は茶褐色を呈す。調整は、外面がハケ、内面～突帯部までが丁寧なナデが施されている。内面の一部に長さ6 mm、幅3～3.5 mmを測る初形をした植物の圧痕が認められるものの、種類については判断出来ない。9は甕の口縁の破片で、内湾気味の口縁端部からわずかに下がった位置に、やや細身の突帯を貼る。突帯貼付後、上端面に粘土を充填し、垂下気味に仕上っている。胎土には細砂粒が多く、器面はやや荒い。焼成はやや悪く、内外面ともに淡黄茶色を呈す。調整は剥落が著しく、内外面とも不明。10は唯一出土した如意形口縁をもつ甕の胴部～口縁部の破片で、直立気味に立ち上がる胴部に、小さく外方に屈曲する短い口縁を形成する。口縁端部には非常に浅い刻目が不規則に施される。頸部下には浅くやや不明瞭な沈線が一条見られる。胎土には砂粒を非常に多く含み、器面は荒い。焼成はやや悪く、粉状に剥落してゆく。色調は外面が暗茶灰色～淡黒茶色、内面は淡黄茶色～暗茶灰色を呈す。内面はナデ調整を施すが、外面は不明。11～15は甕の底部破片で、底上げが低く厚底で脚裾部が外方へ開くもの(11～13)、底上げが高く、脚裾部が外方へ開かないもの(14)、脚部が短いもの(15)、等到大別出来る。



第10圖 SD-01出土土器実測圖 (1/3)

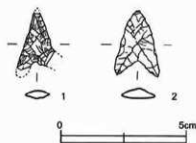
11は底部～胴部下半の破片で、外方に張り出した裾部から脚部を介し、直線的に延びる胴部下半に至る。接地面はやや狭いが、安定感は大い。砂粒を多く含むものの、器面は比較的滑らかで、丁寧な仕上がりをみせる。焼成は良好で、外面は黄茶色～赤褐色、内面は茶褐色～黒灰色を呈す。調整は外面がタテハケ後ヨコナデ、内面はナデ、外底面は丁寧なナデ調整を施す。復原底径8.4cmを測る。12は底部～胴部下半の破片で、張り出した脚部からやや外反しつつ胴部下半に至る。裾部の張り出しが若干小さい為、安定感にやや欠ける。砂粒を多く含む器面は荒い。焼成は普通で、外面が淡褐色、内面は暗茶色を呈す。裾部～胴部外面の位置部に黒斑が見られる。調整は外面がハケ、内面はナデ、外底面はナデ調整を施す。復原底径8.0cmを測る。13は底部～胴部下半の破片で、外方に大きく張り出した裾部から脚部を介し、大きく外方に延びる胴部下半に至る。接地面は狭いが、安定感は大い。砂粒を多く含むものの、器面は非常に滑らかで、丁寧な仕上げが目立つ。焼成は良好で、外面は暗黄茶色、内面は暗茶灰色を呈す。調整は外面が荒いハケ後ヨコナデ、内面がナデ、外底面がナデ調整を施す。復原口径8.8cmを測る。14は底部～胴部下半の破片で、張り出さず直立気味の脚部から、やや外反気味の胴部下半に至る。裾端部はナデにより角を取り、丸味をもって仕上げる。砂粒を多く含むものの、器面は滑らかである。焼成は良好で、外面は黄褐色～淡褐色、内面は黒灰色を呈す。調整は外面が荒いハケ後ナデ、内面がナデ、外底面がナデ調整を施す。復原底径6.0cmを測る。15は底部の破片で、短く外方に張り出した裾部から、非常に短かい脚部を介し胴部下半に至る。現状では薄底気味であるが、本来は粘土塊の充填が施され、厚底であったとみられる。上げ底部分は、指先でわずかに押し上げナデを施しただけの雑なつくりとなっている。胎土は長石を主体とした砂粒を多く含む、器面はやや荒い。焼成は良好で、外面は暗茶褐色を呈す。調整は、外面がハケ後ナデ、外底面はナデ調整を施す。接合状態から、円盤状の粘土塊に粘土ヒモを巻き上げつつ、内底面に小さな粘土塊を詰め底部を形成した過程が観察出来る。復原底径6.4cmを測る。16は壺の頸部～口縁部の破片で、内傾した頸部からやや強く外反した口縁が形成される。口縁端部下をわずかに肥厚させ、丸味を持たせている。胎土には砂粒を多く含むものの、器面は比較的滑らかである。焼成はやや悪く、剥落が著しい。内外面ともに暗茶褐色である。調整は外面が細かいハケ後ナデ調整を施す。復原口径19.4cmを測る。

17は壺の底部～胴部下半の破片で、やや外傾気味の底部から明瞭なくびれを介し、わずかに内湾した胴部下半に至る。底部～胴部境は指押えを施し、くびれを意識したつくりとなっている。胎土には砂粒を多く含む、器面はやや荒い。焼成は良好で、外面は暗茶褐色、内面は白黄茶色を呈す。調整は外面が細かいハケ後ナデ、内面がナデ、外底面がナデ調整を施す。復原底径5.8cmを測る。

18は壺の底部の破片で、外底面にマメ科植物と思われる種子圧痕が見られる。圧痕はやや上下につぶされたように楕円形を呈し、痕跡そのものの深さは2mmとやや浅く、あまり厚みのない原体であったと考えられる。胎土は細砂粒が非常に多く、器面も非常に荒い。焼成もやや悪く、外面は淡黄茶色、内面は白黄色を呈す。調整は内外面ともに不明。復原底径8.4cmを測る。

石器（第11図）

1は漆黒色を呈する黒曜石裂の石鏃である。先端部、及び、両脚部の一部を欠損している。基部の挟りが深い凹板式で、二等辺三角形を呈している。長さ2.2cm+α、幅1.5cm+α、厚さ3.5



第11図 SD-01出土石鏃実測図（2/3）

mmを測る。2はサヌカイト製の石鏃で、完形品である。両側縁の中程に、縄罫と思われる欠損が見られる。挟りの深い凹基式で、やや丸みのある二等辺三角形を呈している。長さ2.6cm、幅1.8cm、厚さ4.0mmを測る。

SD-02

調査区西側南端付近で検出した溝で、SD-04を切り、SD-06に切られる。標高を見ると、西端で34.13m、中央付近で34.15m、東端で34.19mとなっており、南東から北西に流路をとっていたと考えられる。当初、弥生時代に属する溝と考えていたが、東端付近の溝底より須恵器が出土したため、古墳時代後期に掘削されたものと判明した。規模は検出長23.0m、幅0.65m～0.9m、深さ0.1～0.15mを測る。出土遺物として、弥生土器細片、土師器、須恵器などがあつた。

出土遺物

土器（第12図）

須恵器

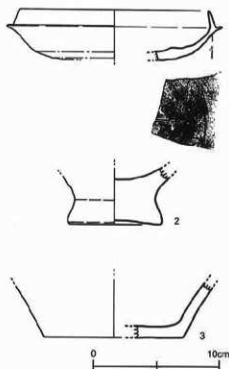
本調査区から唯一出土した須恵器である。本品以外にも古墳時代に属すると思われる土師器壺等が出土しているが、いずれも細片であり今回の報告からは割愛させていただいた。1は坏身で、外底面にヘラ記号が見られる。立ち上がりは受け部より斜め上方に内傾し、中ほどでわずかに外反気味に立ち上がる。端部は鋭くおさめている。胎土は精良であるが、ごくわずかに細砂粒を含む。焼成は良好で、内外面とも暗灰色を呈す。調整は、内面から外面にかけてはナデ調整、外底面は一度反時計回りで回転削りを施した後、一部静止ヘラ削りを回転方向に施し、最終調整としている。復原口径17.0cm、器高4.0cmを測る。

弥生土器

2は底部の破片で、大きく張り出した裾部から脚部を介し、胴下半に至る。わずかに上げ底を呈しているが、かなりの厚底である。胎土には非常に多くの砂粒を含み、器面も荒い。焼成は良好で、内外面とも暗灰色、外底面は暗赤褐色を呈す。調整は不明。復原底径7.4cmを測る。3は壺の底部の破片で、薄い平底からわずかに外反する胴下半に至る。胎土には細砂粒を多く含むが、器面は比較的滑らかである。外底部の一部に、別個体の土器小破片がめり込んでおり、土器製作場周辺には恒常的に土器片が散在していた事を示唆している。焼成は良好で、内外面とも淡白黄褐色を呈す。調整は内面の屈折部が指押えを施している以外は不明である。復原底径10.8cmを測る。

SD-04

調査区西側南端付近で検出した溝で、SD-02、SD-05に切られている。溝底標高は北から南へ減じており、流路も同方位にあったと考えられる。弥生土器細片が出土しているが、時期は不明。規模は検出長10.0m、幅0.35～1.1m、深さ0.1～0.2mを測る。



第12図 SD-02 出土土器実測図（1/3）

SD-05

調査区西端で検出した溝で、SD-04を切っている。溝の北端と南端とのレベル差がほとんどなく、流路方向はわからない。出土遺物も皆無に等しく、時期比定は困難である。ただ、溝内埋土が灰色の砂質土であったため、平安期、または、鎌倉期以降の所産という推測は許されるであろう。規模は検出長13.5m、幅0.4~0.6m、深さ0.1mを測る。

SD-06

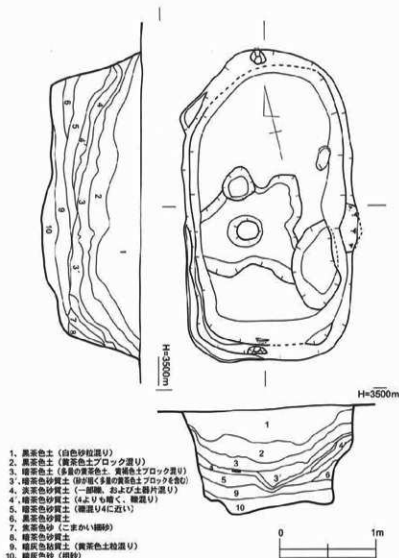
調査区中央部南側で検出した溝で、SD-02を切っている。削平により、検出できたのもわずかで出土遺物も土器の細片のみであり、時期比定は困難であった。規模は検出長2.9m、幅0.2~0.4m、深さ0.1m前後を測る。

3 土壌 (SK)

今回の調査では、多数の土壌を検出した。土壌の性格上、(1)貯蔵穴状土壌(2)取水土壌(3)その他の土壌、に分類した。以下、上記分類に従って各遺構について記述する。

(1) 貯蔵穴状土壌

今回の調査中、貯蔵穴の可能性のある遺構としては唯一のものである。ただ、八女地区内では弥生時代前期~中期前半における一般的な貯蔵穴は円形、または、隅丸方形プランを呈している事例が多く、若干疑問が残る。



第13図 SK-01 (貯蔵穴状土壌) 遺構実測図 (1/40)

SK-01 (第13図)

調査区中央部北側で検出した貯蔵穴状土壌である。平面プランは隅丸方形を呈し、規模は長軸長3.25m、短軸長1.8m、深さ1.15mを測る。長軸の方は北北東を指す。土壌南辺の壁面に挟り状の穴が2個穿たれており、昇降用の階段として利用されていたと考えられる。出土遺物として弥

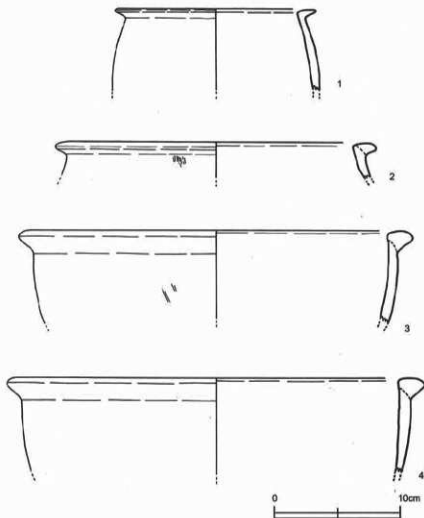
生土器の甕や、黒曜石、安山岩の剥片等が出土している。

出土遺物

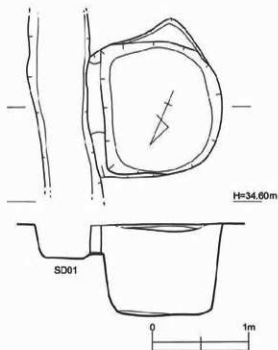
土器（第14図）

1は甕の胴部～口縁部の破片で、膨らみ気味の胴部から、内傾気味の口縁部が形成される。口縁端部には細身の突帯を貼り付け、端部を水平気味に仕上げる。胎土には砂粒を多量に含み、器面は非常に荒い。焼成は悪く、器壁も非常に軟質で、外面は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈す。調整は内外面とも不明。復原口径16.2cmを測る。

2は甕の口縁部の破片で、内傾した口縁部の端部に突帯を貼り付け、やや内傾気味に仕上げる。胎土には多くの砂粒を含み、器面は非常に荒い。焼成もやや悪く、内外面とも暗褐色を呈す。調整は、外面の一部にタテハケが認められる以外は不明。復原口径26.0cmを測る。3は鉢の胴部～口縁部の破片で、膨らみのある胴部から内傾気味の口縁が形成される。口縁端部にはやや厚めの突帯を貼り付け、上端面は水平に仕上げる。胎土にはやや大粒の砂粒を多く含み、器面は非常に荒い。焼成は良好で、外面は暗褐色、内面は淡黄茶色を呈す。調整は不明。復原口径32.0cmを測る。4は鉢の胴部～口縁部の破片で、やや丸みを帯びた胴部中位から、直線気味に上方に向かう胴部上半を介し、そのまま口縁を形成する。口縁端部にはやや厚めの突帯を貼り付け、上端面を水平に仕上げる。胎土には大粒の砂粒を多く含み、器面は荒い。焼成は比較的良好で、外面は淡茶褐色、内面は淡黄茶



第14図 SK-01（貯蔵穴状土壘）出土土器実測図（1/3）



第15図 SK-02遺構実測図（1/40）

色を呈す。調整は内外面不明。復原口径34.0cmを測る。

(2) 取水土壌

調査区内において、計19基を検出した。

取水土壌という名称を設定した理由として、次の4点を挙げておきたい。

①全てSD-01の流路方向(北→南)に対し、直角に並ぶ。

②削平され、その痕跡を失ったものもあるが、遺存しているものは全て取水、又は、排水が可能な施設を有し、それらが全てSD-01に接続している。

③SD-01と各土壌との土層断面観察を行うと、SD-01からの土砂の流入を示す痕跡がほぼ全てで確認出来る。

④各土壌の最下層には、必ず水の流入を示す暗灰色細砂の堆積が見られる。

特に③・④の事実から、各土壌が流水を取り入れていた事は確実と思われる。

以上、簡単に取水土壌の名称設定理由を述べたが、機能そのものについては後述する事とし、ここでは各土壌の規模等の詳細について記述したい。

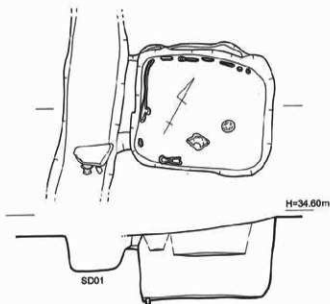
SK-02 (第15図)

調査区中央部で検出した。規模は長軸長1.4m、短軸長1.4m、深さ0.8mを測り、長軸方位は北北西を指す。19基中2番目の大きさで、略測での容積は1.5 m^3 である。出土遺物は弥生土器の甕、壺などがあるが、大半は破片資料であった為、本報告中では図示していない。

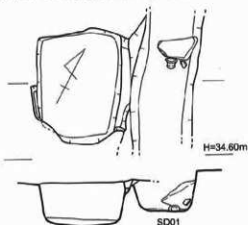
弥生時代中期前半頃の所産と思われる。

SK-03 (第16図)

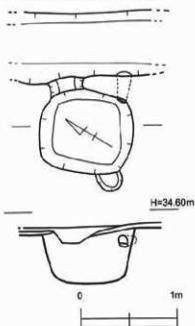
調査区中央部で検出した。規模は長軸長1.6m、短軸長1.3m、深さ0.8mを測り、長軸方位は西南西を指す。取水土壌中、最大の規模を有し、略測での容積は1.65 m^3 である。取水口南端部付近のSD-01内に40cm×20cm程の板状の石材が立てかけられるようにあり、ここで水流を受け取めS



第16図 SK-03遺構実測図 (1/40)



第17図 SK-04遺構実測図 (1/40)



第18図 SK-05遺構実測図 (1/40)

K-03内に導水したと考えられる。また、土壌底面には壁溝状の痕跡があり、矢板を打ち込んで壁面を保護していたと思われる。出土遺物として弥生土器の壺や甕がある。甕の外底面には稲初圧痕が認められ、取水土壌群が農業と関連した遺構群として示唆的である。

出土遺物

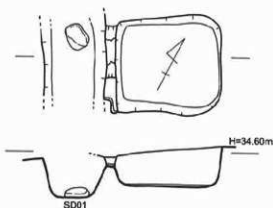
土器（第35図1～3）

1は甕の口縁部の破片で、やや内傾気味の胴部から、そのまま口縁が形成される。口縁端部には突帯を貼り付け、内側をわずかにつまみ出し、外側は突帯下に粘土を充填し、胴部との境を目立たなく仕上げる。胎土には砂粒を多く含み、器面は荒い。焼成は良好で、外面は暗褐色～暗茶灰色、内面は暗茶灰色を呈す。調整は、内面がナデ調整を施すが、外面は不明。復原口径26.0cmを測る。2は甕の底部破片で、わずかに張り出した裾部から、垂直気味に立ち上がる脚部へと続く。やや上げ底を呈しているが、接地面は広く、安定感は大い。胎土には砂粒を非常に多く含み、器面も荒い。焼成は良好で、外面は暗褐色～暗茶色、内面は淡茶色を呈す。調整は外面、及び、外底面がナデ調整を施している。内面は不明。復原底径11.6cmを測る。

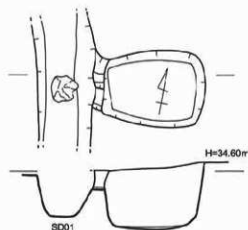
3は甕の底部～胴部下半の破片で、大きく斜め外方に延びる脚部から、そのまま胴部下半へと続く。平底の外底面には多種の植物圧痕があり、内1点に長さ7.5mm、幅4.0mmの稲初圧痕が完全な形で観察出来た。胎土には長石を主体とした砂粒を多く含むが、器面は比較的滑らかである。焼成は良好で、内外面とも淡茶褐色を呈す。調整は外面が細かいハケ、内面はナデ調整、外底面は未調整である。底径9.9cmを測る。

SK-04（第17図）

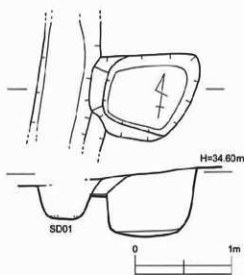
調査区中央部で検出した。SK-02とは60cmの間において隣接している。規模は長軸長1.2m、短軸長1.0m、深さ0.45mを測り、長軸方位は北北西を指す。略測での容積は0.5m³である。



第19図 SK-06遺構実測図（1/40）



第20図 SK-07遺構実測図（1/40）



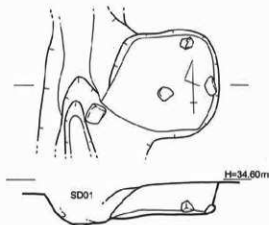
第21図 SK-08遺構実測図（1/40）

出土遺物として、弥生土器の甕底部がある。

出土遺物

土器（第35図4）

4は甕の底部～胴部下半の破片で、大きく張り出した裾部から脚部を介して、斜め上方に直線的に延びる胴部下半へと至る。わずかに上げ底を呈しているが、かなりの厚底で、その厚さは5.0cmを測る。裾部の広がりに対し底が非常に厚く、やや安定感に欠ける。砂粒を多く含むが、器面は比較的滑らかである。焼成は良好で、外面は暗黄茶色～茶褐色、内面は淡黒茶色を呈している。調整は外面が細かいハケ後ナデ、内面はナデ、外底面はナデ調整を施す。底径8.7cmを測る。

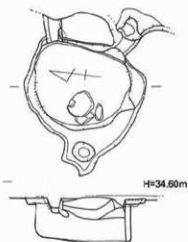


第22図 SK-09遺構実測図（1/40）

SK-05（第18図）

調査区中央部で検出した。SK-04とは20cmの間をおいて隣接している。規模は長軸長1.1m、短軸長1.0m、深さ0.6mを測り、長軸方位は北北西を指す。略測での容積は0.6m³である。本土壤の取排水施設はやや特異で、取水口に対し若干レベルを減じてトンネル状に排水口を取り付けている。これは、取水土壌の主な役割が積極的に水を「貯める」ものではなかった事を示唆している。

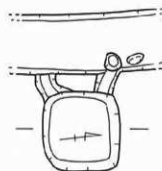
出土遺物は無かった。



第23図 SK-10遺構実測図（1/40）

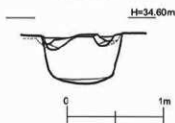
SK-06（第19図）

調査区中央部で検出した。規模は長軸長1.2m、短軸長1.05m、深さ0.4mを測り、長軸方位は西西南西を指す。略測での容積は0.5m³以下である。出土遺物は無かった。



SK-07（第20図）

調査区中央部南側で検出した。規模は長軸長1.2m、短軸長0.8m、深さ0.7mを測り、長軸方位は西を指す。略測での容積は0.55m³である。取水口前面のSD-01内に30cm×30cm程の石材が据え置かれており、機能的にはSK-03と同様のものと考えられる。平面プランは羽子板形を呈し、方形、長方形プランが大半を占める中、やや異質な感がある。出土遺物は無かった。

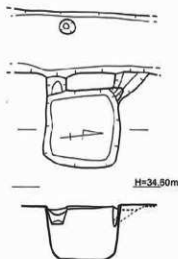


第24図 SK-11遺構実測図（1/40）

SK-08 (第21図)

調査区中央部南側で検出した。規模は長軸長1.1m、短軸長0.9m、深さ0.7mを測り、長軸方位は西を指す。略測での容積は0.56m³である。平面プランは羽子板形を呈し、北に隣接するSK-07と同じタイプである。

出土遺物は、弥生土器の細片しかなく、図示出来なかった。

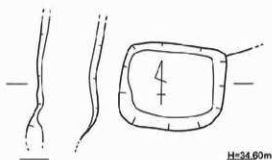


第25図 SK-12遺構実測図 (1/40)

SK-09 (第22図)

調査区中央部南側で検出した。規模は長軸長1.2m、短軸長1.1m、深さ0.3mを測り、長軸方位は西を指す。容積は計算上約0.4m³あるが、接続しているSD-01の溝底レベルと竈底レベルがほぼ同じで、両者間はほぼフラットな底面を成している。これは「貯水」をまったく意識しておらず、又、後世の擾乱の痕跡も見当たらない為、貯水を伴わない取排水を行っていたものと考えられる。

出土遺物として、弥生土器の甕類があるが、細片資料の為図示していない。



第26図 SK-13遺構実測図 (1/40)

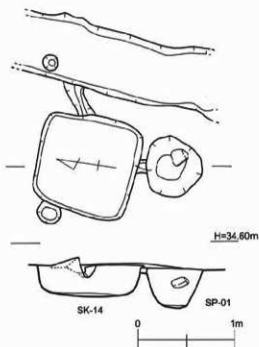
SK-10 (第23図)

調査区中央部南側で検出した。規模は長軸長1.05m、短軸長0.95m、深さ0.5mを測り、長軸方位は北北東を指す。略測での容積は0.35m³である。南西隅に30cm大の丸・角礫が埋まっていたが、使用目的は不明。出土遺物として、弥生土器の甕等があったが、いずれも細片である為、図示していない。



SK-11 (第24図)

調査区中央部南端付近で検出した。規模は長軸長1.0m、短軸長0.8m、深さ0.5mを測り、長軸方位は西北西を指す。略測での容積は0.35である。土器細片が出土しているが、図示には到らなかった。



第27図 SK-14・SP-01遺構実測図 (1/40)

SK-12 (第25図)

調査区中央部南端付近で検出した。SK-11とは60cmの間において隣接している。規模は長

軸長1.0m、短軸長0.8m、深さ0.6mを測り、長軸方位は西を指す。略測での容積は0.3 m^3 である。出土遺物は無かった。

SK-13 (第26図)

調査区中央部南端で検出した。SK-12とは50cmの間において隣接している。規模は長軸長1.0m、短軸長0.8m、深さ0.6mを測り、長軸方位は西北西を指す。略測での容積は0.58 m^3 である。

本土壤の堆積土中には暗灰色細砂、または、黒色粘質土等が見られない為、取水土壌としての積極的な要件を満たしていないが、土壌の配置状況等から今回は一連の取水土壌群中に組み入れる事とした。出土遺物は無かった。

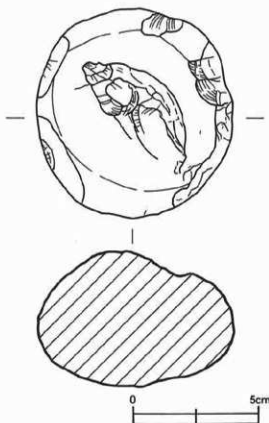
SK-14 (第27図)

調査区中央部南端で検出した。隣接するSP-01とは長さ10cm、幅12cmの小溝を介して接続しており、機能的に一体化していたものと考えられる。規模は長軸長1.3m、短軸長1.1m、深さ0.3mを測り、長軸方位は西北西を指す。出土遺物として弥生土器の甕、黒曜石原石、剥片等がある。

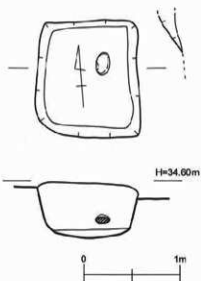
出土遺物

石器 (第28図)

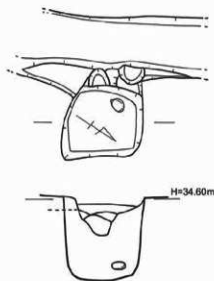
円形の黒曜石の原石で、全面に自然面を残す。大きな破損や人為的な剥離面は観察出来ず、産出地



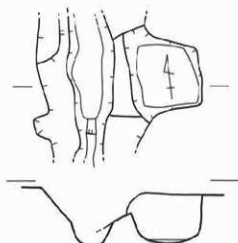
第28図 SK-14出土黒曜石原石実測図 (2/3)



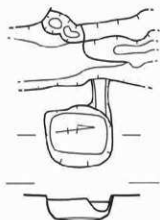
第29図 SK-15遺構実測図 (1/40)



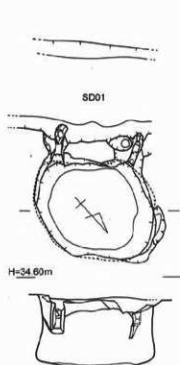
第30図 SK-16遺構実測図 (1/40)



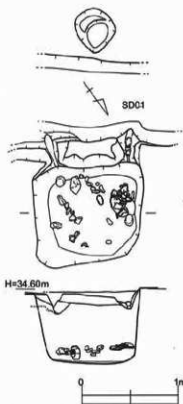
第31図 SK-21遺構実測図〔1/40〕



第32図 SK-22遺構実測図〔1/40〕



第33図 SK-35遺構実測図〔1/40〕



第34図 SK-39遺構実測図〔1/40〕

からの直接的な搬入品と思われる。直径7.8～8.3cm、厚さ5.4cm、重さ420gを測る。

SK-15 (第29図)

調査区中央部南端で検出した。今回検出した取水土壌群中、最も南で検出されたものである。SK-14とは90cm、SP-01とは20cmの間において隣接している。規模は長軸長1.2m、短軸長1.1m、深さ0.5mを測り、長軸方位は北北東を指す。略測での容積は0.6m³である。

本土壌もSK-13と同様、取水、または排水施設を削平により失っているものの、堆積土中の最下層には暗灰色細砂が見られ、一連の取水土壌群と認識して良いと思われる。出土遺物として弥生土器破片があったが、いずれも細片であった為、図示していない。

SK-16 (第30図)

調査区中央部で検出した。SK-06とは30cmの間において隣接している。規模は長軸長0.9m、短軸長0.8m、深さ0.9mを測り、長軸方位は北西を指す。略測での容積は0.54m³である。出土遺物は無かった。

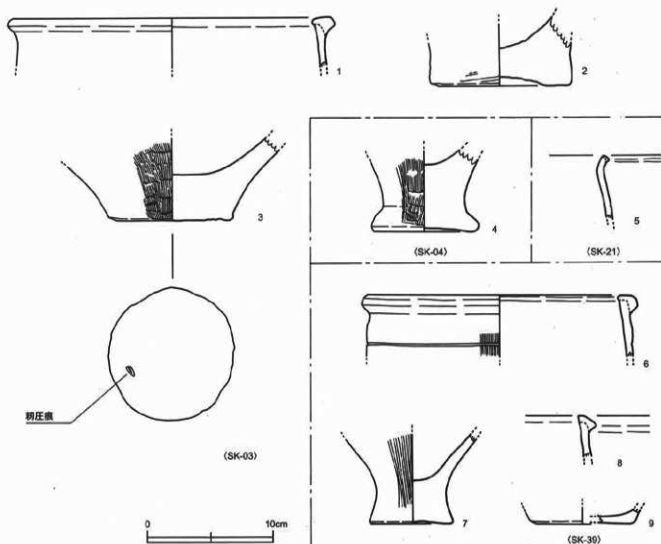
SK-21 (第31図)

調査区中央部南側で検出した。SK-09とは70cmの間において隣接している。規模は長軸長0.8m、短軸長0.7m、深さ0.5mを測り、長軸方位は西を指す。略測での容積は0.26m³である。出土遺物として、弥生土器の甕や壺、黒曜石の原石等がある。

出土遺物

土器 (第35図5)

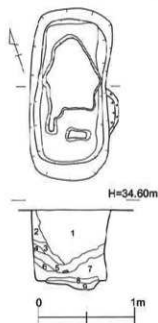
5は甕の胴部～口縁部の破片で、内傾気味の胴部に、小さく外方に屈曲する短い口縁を形成する。口縁端部に刻目が見られないものの、頸部下にある不明瞭な沈線や、胎土、色調等の類似点などから、SD-01より出土した如意形口縁を持つ甕と同一個体である可能性が高い。



第35図 取水土坑 (SK-03,04,21,39) 出土土器実測図 (1/3)

SK-22 (第32図)

調査区中央部南側で検出した。SK-21とは1.0mの間をおいて隣接し、SK-10とはSD-01を介して正面にあたる。規模は長軸長0.9m、短軸長0.7m、深さ0.3mを測り、長軸方位は西北西を指す。略測での容積は0.12㎡であり、取水土壌群中最も容積規模が小さい。出土遺物は無かった。



1. 淡黄茶色土 (黄褐色粘質土・ブロックを多量に含む)
2. 黄茶色土
3. 淡黄茶色土 (ブロック散在)
4. * (ブロック散在)
5. 黄茶色土 (若干粘性有り)
6. * (微量の黄茶色土・ブロック含む)
7. 暗灰色砂 (中砂・堅固の礫層)
8. 白黄褐色粘土・黄灰色粘土
9. 暗灰色砂層 (2~3cmの小礫を多く含む)

第36図 SK-17遺構実測図 (1/40)

SK-39 (第34図)

調査区中央部北端付近で検出した。SK-35とは5cmの間をおいて隣接している。これまでの取水土壌群とはやや異なり、坑内底面から多量の礫群が出土した。但し、被熱痕や加工痕などは見られず、その用途は不明。規模は長軸長1.4m、短軸長1.15m、深さ0.8mを測り、長軸方位は北東を指す。略測での容積は0.78㎡である。出土遺物として、弥生土器の甕等が出土しており、その特徴から城ノ越期併行、つまり弥生時代中期初頭にあたると思われる。

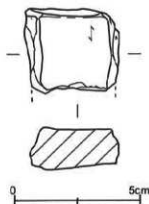
出土遺物

土器 (第35図6~9)

6は甕の胴部下半~口縁部の破片で、やや内傾気味の胴部から、そのまま口縁部が形成される。口縁端部には断面台形の突帯が貼られ、突帯下の頸部付近には、明瞭な沈線が一条見られる。胎土には砂粒を若干含むが、器面は比較的滑らかである。焼成は良好で、外面は淡茶褐色、内面は茶褐色を呈す。調整は、外面がハケ後一部ナデ、内面がナデ調整を施す。復原口径2.2cmを測る。7は甕の底部~胴部下半の破片で、外方にやや張り出した裾部から、長めの脚部を介し、直線的に延びる胴部下半に至る。外底面中央部付近を指押えにより、上げ底状に仕上げる。胎土には、長石や雲母片岩を主体とし、黒雲母を含まない砂粒を多く含む、器面はやや荒い。焼成は良好で、外面は暗赤褐色、内面は淡黒茶褐色を呈す。調整は外面が荒いハケ後ナデ、内面がナデ、外底面はナデ調整を施す。胴部外面の一部に煤が付着している。復原底径6.4cmを測る。

SK-35 (第33図)

調査区中央部北端付近で検出した。これまで検出した取水土壌の全ては調査区中央部以南にあったが、本土坑とSK-39はSK-03より19m程間をおいて、調査区の北端付近に独立しているかのように2基が並列している。規模は長軸長1.4m、短軸長1.1m、深さ0.7mを測り、長軸方位は北を指す。略測での容積は0.73㎡である。出土遺物として弥生土器、黒曜石剥片があるが、細片であった為、図示していない。



第37図
SK-17出土礫石実測図 (2/3)

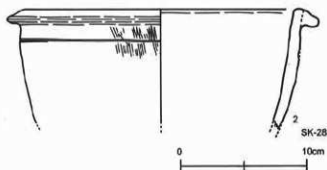
8は甕の口縁部の破片で、内傾気味の口縁部に断面三角形の突帯を貼り付け、垂下させる。胎土には砂粒を少量含むが、器面は滑らかである。焼成は良好で、外面は淡茶褐色～淡黒茶色、内面は淡茶灰色を呈す。調整は外面が斜めハケ後ナデ、内面はナデ調整を施す。頸部下には斜めハケ後に沈線状の横線が一条施されている。9は小型甕の底部破片と思われるが、ミニチュア品の可能性もある。胎土には砂粒も多く含む、器面も荒い。焼成はやや悪く、外面は黒茶色、内面は淡黄褐色を呈す。調整は不明。内面は外面に比べ、非常に平滑に仕上げられている。復原底径8.4cmを測る。



(3) その他の土壌

今回の調査では19基の土壌を検出した。この中には幾つか分類出来るものもあるが、本報告では一括報告としたい。

以下、各遺構について記述する。



第38図 その他の土壌 (SK) 出土土器実測図 [1/3]

SK-17 (第36図)

調査区中央部で検出した土壌で、平面プランは隅丸長方形を呈する。規模は長軸長1.8m、短軸長0.8m、深さ0.85mを測り、長軸方位は北北東を指す。土壌の規模や形態、土層面の観察等から土壌墓ではないかと思われる。出土遺物として、弥生土器細片、砂岩製の砥石等がある。

出土遺物

石器 (第37図)

砂岩製の砥石である。色調は白色を呈し、やや軟質で表面はろい。欠損部分が多く詳細は不明だが、少なくとも3面の使用が認められる。

SK-18

調査区東側南端で検出した土壌で、平面プランは不整形である。規模は長軸長3.0m + α 、短軸長3.3mを測り、長軸方位は北北東を指す。埋土状況より、堅穴土壌と考えられる。

SK-19

調査区東側中央部で検出した土壌で、平面プランは不整形である。規模は長軸長3.5m + α 、短軸長1.5～2.6mを測り、長軸方位は北東を指す。埋土状況より、堅穴土壌と考えられる。

SK-20

調査区東側中央部で検出した土壌で、平面プランは楕円形を呈する。規模は長軸長0.8m、短軸長0.7m、深さ0.26mを測り、長軸方位は西北西を指す。出土遺物無し。

SK-23

調査区西端で検出した土壌で、平面プランは楕円形を呈する。規模は長軸長1.4 m、短軸長1.1 m、深さ0.1 mを測り、長軸方位は北西である。

弥生土器の甕等が出土している。

SK-24

調査区西端で検出した土壌で、平面プランは不整形である。規模は長軸長2.6 m、短軸長2.2 m、深さ0.2 mを測り、長軸方位は西北西を指す。

出土遺物無し。

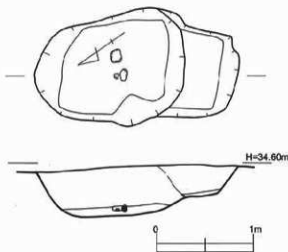
SK-25

調査区西部南側で検出した土壌で、平面プランは不整形である。規模は長軸長1.6 m、短軸長1.2 m、深さ0.1 mを測り、長軸方位は北西を指す。出土遺物として、弥生土器の高坏などがある。

出土遺物

土器(第38図1)

高坏の坏部口縁周辺の破片で、鋤先状口縁を有する。口縁部上端面から坏部内面にかけて丹塗りを施し、面の一部には黒斑が見られる。胎土には細砂粒を多く含み、器面は荒い。須玖式土器の搬入品ではない。焼成は良好で、内外面とも淡茶褐色を呈する。調整は、内面がナデ調整だが、外面は不明。復原口径25.0 cmを測る。



第39図 SK-34遺構実測図 [1/40]

SK-26

調査区西部南側で検出した土壌で、SD-02と長軸方位を同一にとって並列し、SK-33を切っている。平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長軸長3.1 m、短軸長1.15 m、深さ0.35 mを測り、長軸方位は北西を指す。土壌西端にはフラットが一段有り、域内埋土中に少量の焼土や炭化物が含まれていた。出土遺物として、弥生土器の甕などがあるが細片の為、図示していない。

SK-27

調査区西部南端で検出した土壌で、平面プランは不整形である。規模は長軸長3.1 m + α 、短軸長1.1 m + α 、深さ0.1 ~ 0.2 mを測る。弥生土器が出土しているが、細片の為図示していない。

SK-28

調査区西部南端で検出した土壌で、平面プランは長円形を呈する。規模は長軸長1.4 m、短軸長

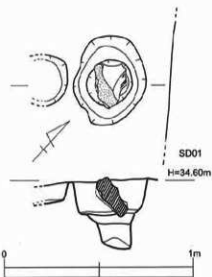
0.64m、深さ0.2mを測り、長軸方位は北西を指す。

弥生土器の壺、甕類の他、安山岩の剥片等が出土している。

出土遺物

土器（第38図2）

甕の胴部～口縁部の破片で、内湾気味の胴部から、直線的に外方に延びる口縁部が形成される。口縁端部にはやや厚めの突帯を貼り付け、ナデにより端部を垂下気味に仕上げる。胎土には砂粒を多量に含み、器面は非常に荒い。焼成は比較的良好で、内外面ともに淡茶褐色～暗茶色を呈する。調整は、外面が荒いタテハケ、内面がナデ調整を施す。調整後に頸部直下に荒い沈線を一条巡らせており、亀ノ甲タイプの最終末にあたるものである。復原口径25.0cmを測る。



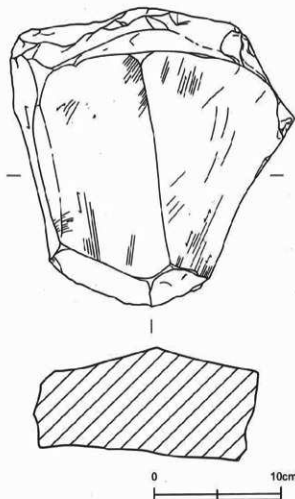
第40図 SP-02遺構実測図〔1/20〕

SK-29

調査区西部南側で検出した土塊で、平面プランは不整形形である。規模は長軸長2.0m、短軸長0.7m、深さ0.1mを測り、長軸方位は北西を指す。弥生土器細片がわずかに出土している。

SK-30

調査区西部南側で検出した土塊で、平面プランは不整形形である。規模は長軸長1.2m、短軸長0.6m、深さ0.1mを測り、長軸方位は北西を指す。弥生土器細片がわずかに出土している。



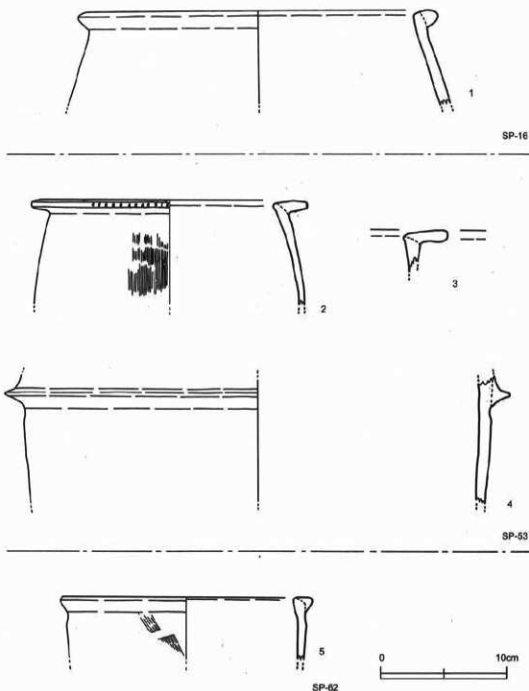
第41図 SP-02出土磁石実測図〔1/3〕

SK-31

調査区西部南側で検出した土塊で、平面プランは不整形形である。規模は長軸長1.35m、短軸長1.15m、深さ0.1mを測り、長軸方位は北北西を指す。弥生土器細片がわずかに出土している。

SK-32

調査区西部南側で検出した土塊で、平面プランは楕円形を呈する。規模は長軸長2.1m、短軸長1.8m、深さ0.25mを測り、長軸方位は北西を指す。埋土状況より、堅穴土塊と考えられる。



第42図 ピット (SP) 出土土器実測図 (1/3)

SK-33

調査区西部南側より検出した土壌で、SD-02、SK-26に切られる。平面プランは不整形で、規模は長軸長2.2m+α、短軸長1.1m、深さ0.15mを測る。長軸方位は北北西を指す。弥生土器細片がわずかに出土している。

SK-34 (第39図)

調査区中央部で検出した土壌で、平面プランは隅丸長方形を呈し、規模は長軸長2.15m、短軸長1.2m、深さ0.55mを測る。長軸方位は北東を指す。SK-26と同様に一辺にフラットを

一段有している。弥生土器細片の他、安山岩の剥片や被熱した磨石等が出土している。

SK-36

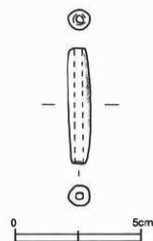
調査区西部中央で検出した土壌で、平面プランは楕円形を呈す。未掘の
為詳細な規模等は不明だが、検出時の規模は長軸長1.7m、短軸長1.
5mを測る。平面形状及び埋土状況から堅穴土壌と考えられる。

SK-37

調査区西端部で検出した土壌で、平面プランは楕円形を呈す。未掘の
為詳細な規模等は不明だが、検出時の規模は南北方向で3.0m、東西方向で
1.7m+αを測る。堅穴土壌と考えられる。

SK-38

調査区西端部で検出した土壌で、平面プランは楕円形を呈す。未掘の
為詳細な規模等は不明だが、検出時の規模は長軸長2.0m、短軸長1.9m
を測る。堅穴土壌と考えられる。



第43図 排土中出土
管状土製品実測図(2/3)

4 ビット(SP)出土の遺物

調査区内において、多数のビットを検出した。埋土状況や出土遺物から大半は弥生時代のものと考
えられるが、堅穴住居や掘立柱建物の柱穴等として捉えられたものはごく一部で、本来、別の遺構と
して認定されるべきものも多く残されている可能性は捨て切れない。

第40図に示したSP-02はこの類のビットと考えられ、上部構造物等が廃棄される折、用済み
の穴に使用しなくなった砥石を投棄したものと考えられる。

以下では、ビットから出土した主要な出土遺物について記述する。

SP-02出土遺物

石器(第41図)

目の細かい白色の砂岩製砥石である。平面形は扇状を呈し、6面中5面に使用痕を残す。表面、及
び、左側面は特に砥ぎ込まれており、湾曲し、面中央に稜を成す。遺存する周縁の一面に自然面を残
している。長さ23.7cm、幅22.4cm、厚さ9.0cm、重さ約5.5kgを測る。

SP-16、53、62出土遺物

土器(第42図1~5)

1は甕の胴部上半~口縁部の破片で、内傾し直線的に延びる胴部から、わずかに外反気味の口縁部
が形成される。口縁端部には、厚く丸みをもった突帯を貼り付ける。胎土に多量の砂粒を含み、器面
は非常に荒い。焼成はやや悪く、外面は淡黄茶色、内面は褐色を呈する。摩耗著しく、調整は不明。
復原口径28.4cmを測る。

2は甕の胴部上半~口縁部の破片で、内湾気味の胴部から、そのまま口縁部が形成される。口縁端

部には、幅広で長めの突帯を貼り付け、外端部には規則的に、且つ、浅めの刻目を入れ、内端部はつまみ出しで仕上げる。胎土は滑らかである。焼成も良好で、全体的に淡赤褐色を呈する。調整は胴部内面～頸部がナデ、又はヨコナデを施し、外面は細かいハケで調整している。突帯部分を含む全面に丹塗りが施されており、非常に丁寧な仕上がりとなる。復原口径21.8cmを測る。3は甕の口縁部の破片で、口縁端部に幅広で断面長方形の突帯を貼り付け、端部上面を水平気味に仕上げる。胎土には砂粒や細砂をわずかに含むが、器面は比較的滑らかである。焼成は良好で、内外面とも淡黄褐色～淡褐色を呈す。調整は内面がナデ、口縁上端面がハケ調整を施されている、外面は不明。4は甕の胴部の破片である。胴部最大径付近に突帯を一条貼り付けている。胎土には砂粒が多く、器面はややザラついている。焼成はやや悪く、内外面とも淡黄褐色を呈する。摩耗著しく、調整は不明。5は小形の甕の口縁部破片で、直立する胴部から、わずかに内傾した口縁部が形成される。口縁端部には短かく、そして丸みのある突帯を貼り付け、端部上面を水平に仕上げる。胎土には砂粒も多く含み、器面は少々荒い。焼成は良好で、外面は暗茶灰色、内面は淡黄褐色を呈す。調整は、外面が斜方向のハケ、内面はナデ調整を施してある。復原口径20.0cmを測る。

5 その他の遺物

ここでは第1期と第2期の調査区反転中、排土の中から出土した管状土製品について、簡単な報告を行う。

排土中出土遺物

土製品（第43図）

調査区内の排土から見つかった管状土製品。出土遺構は不明。胎土は精良で砂粒等は含まれない。焼成も良好で、淡茶色を呈している。小口部を含む器面全体に丹塗りが施されており、非常に滑らかに仕上げられてはいるが、湾曲面も多く、仕上げはやや悪い。長さ4.6cm、径0.8～0.85cmを測る。

V 土質分析結果報告

応用地質株式会社

はじめに

本業務では、福岡県八女市の高島遺跡で検出された堆積物について、植物珪酸体、珪藻分析を実施した。ここでは、遺跡の概要や遺構の検出状況などを除き、分析結果を中心に報告する。

1. 試料

分析は8試料について実施した。植物珪酸体分析には、土壌試料6点（SK01最下層・SK03最下層・SK07第5層・SK13第4層・SK35の①・②）を、珪藻分析には土壌試料2点（SK03第14層、SK03第3層）を供した。

2. 分析方法

○植物珪酸体

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稲作について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種別の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

○珪藻

湿重約10gについて、過酸化水素水と塩酸により試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加えた後、蒸留水を満ちし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去したうえで、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、L字形管分離で砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリユウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数する。なお珪藻殻が半分以上破損したものについては同定・計数は行わない。珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1986-1991)、Desikachari(1987)などを参考にする。

3. 結果と考察

○植物珪酸体

結果を表1、図1に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に

多数の小孔（溶食痕）が認められる。また、イネ属やムギ類、キビ類などの栽培植物は全く認められない。

以下に、遺構毎の産状を述べる。

・SK01

最下層では、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。タケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属の割合も高い。

・SK03

最下層では、他の遺構と比較して検出個数が少ない。しかし、産状は同様であり、タケ亜科とヨシ属の産出が目立ち、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども認められる。

・SK07

第5層ではタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。タケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属の割合も高い。

・SK13

第4層でもタケ亜科やヨシ属の産出が目立ち、ウシクサ族やイチゴツナギ亜科なども検出される。

・SK35

①と②では、いずれもタケ亜科、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出され、ともにタケ亜科の産出が目立つ。また、②よりも①でヨシ属の割合が高い。

なお、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており（近藤，1982：杉山・藤原，1986）、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。

今回調査した各遺構では保存状態の悪い中でタケ亜科の多産が見られ、土壌内での物理・化学的作用を受ける中でタケ亜科が残留しやすいかと思われる。

またヨシ属は、湿潤場所に生育する種類である。しかし、検鏡したプレパラート中には珪藻化石が全く認められず、湿潤環境を示唆するものであるか疑問も残る。堆積環境については、他の微化石を始めとする分析によって資料を集めると共に、土壌内部の埋積環境や土壌の構築されている場所の立地等を考慮する必要がある。土壌の埋積状態や調査区内の微地形を含めて、今回の産状を改めて検討することが望まれる。

○珪藻

分析を行った2試料共に珪藻化石は検出されなかった。

珪藻化石が検出されないのは、分析試料の堆積時に珪藻が存在しなかったわけではなく、堆積後の続成作用によって分解消失したものと思われる。一般には、珪藻の殻は珪質であるために容易には消失することなく、堆積物中に保存される。しかし、堆積時とその後の環境によって、保存の状態は変化する。堆積直後が、水中であったり、水や空気を通しにくいシルトあるいは粘土中に覆われた場合は、保存され易いが、好気的な環境に曝された状態では、バクテリアの作用などにより、分解が促進されることが、経験的に知られている。また、水を通し易い堆積物の場合は、水のpH等の変化によって容易に溶解されてしまう場合がある。多くの場合は、バクテリアの影響と堆積層の透水性の問題等の複合要因と考えられる。

今回分析を行った試料も、堆積時以降は、好気的環境下にあった可能性が示唆される。

注：好気的環境とは、水の影響が少ないために、直接的に大気に曝された状態のことである。沖積地の場合は、河川や周辺の沼沢地あるいは湿地のような常に水の中にあつて大気に触れない状況の場所以外の草地・裸地等である。

低地では、通常は水の影響のない場所でも、一時的には氾濫堆積物で覆われることが少なくない。この氾濫堆積物中には、堆積速度が速いために、絶対量は少ないにしても、堆積直後にはある程度の量の珪藻殻が含まれている。しかし、堆積後に水が引いてしまえば好気的な環境になる。そのため、バクテリア等による分解が促進されるものと考えられる。低地を覆う氾濫堆積物には、珪藻化石が残っていないことの方が多いためである。

引用文献

- Desikachary, T. V., 1987, Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madaras-600044. pp. 1-13, Plates: 401-621
- Hustedt, F., 1930, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, vol. 7, Leipzig, Part 1, p. 920.
- Hustedt, F., 1937-1938, Systematische und okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatera. I ~ III. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15 p. 131-809, p. 1-155, p. 274-349.
- Hustedt, F., 1938, Systematische und okologische Untersuchungen mit die Diatomee-Flora von Java, Sumatara nach den material der Deutschen limnologischen Sunda Expedition. Arch. Hydrobiol. suppl
- Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, vol 7, Leipzig, Part 2, p. 845
- Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz, vol. 7, Leipzig, Part 816.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliotheca Diatomologica, vol 9, p. 250. Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(1): pp. 876.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(3): pp. 576.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(2): pp. 596.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2(3): pp. 437.
- 近藤鍊三 (1982) Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究。昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書, 32 p.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用。第四紀研究, 25, p. 31-64.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-。考古学と自然科学, 19, p. 31-64.

表 1. 土壌試料の微化石分析内容

	遺構名	層位	備 考	分析項目	
				植物珪酸体分析	珪藻分析
1	SK01	最下層		○	
2	SK03	最下層		○	
3	SK07	第 5 層		○	
4	SK13	第 4 層		○	
5	SK35	①	暗黒茶色土と暗灰色細砂の境	○	
6	SK35	②	暗灰色細砂層最下部	○	
7	SK03	第14層			○
8	SK13	第 3 層			○

表2 植物珪酸体分析結果

種 類	遺構名 層 位	SK01 最下層	SK03 最下層	SK07 第5層	SK13 第4層	SK35 ①	②
イネ科葉部短細胞珪酸体							
タケ亜科		102	38	106	136	122	135
ヨシ属		46	14	51	47	49	30
ウシクサ族ススキ属		11	4	19	14	13	21
イチゴツナギ亜科		7	3	6	6	2	2
不明キビ型		18	11	10	7	10	4
不明ヒゲシバ型		21	11	13	22	9	12
不明ダンテク型		7	4	4	8	5	6
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
タケ亜科		46	25	60	60	56	61
ヨシ属		30	6	27	59	28	19
ウシクサ族		17	9	10	13	16	17
不明		43	8	42	50	65	42
合計							
イネ科葉部短細胞珪酸体		212	85	209	240	210	210
イネ科葉身機動細胞珪酸体		136	48	139	182	165	139
総計		348	133	348	422	375	349

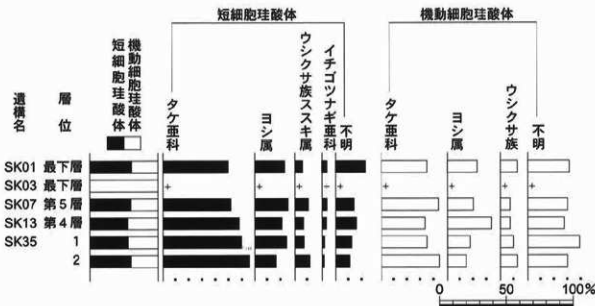
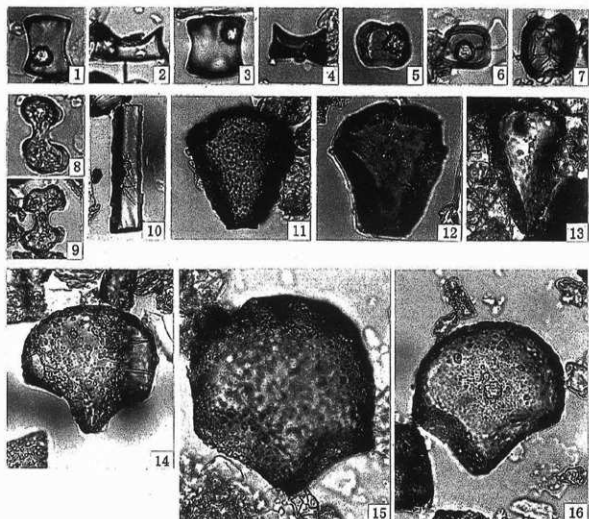


図1 植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、+はイネ科葉部短細胞珪酸体で200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体で100個未満の試料で検出された種類を示す。



50 μ m

(1-7, 9)

50 μ m

(8-10, 16)

- | | |
|-----------------------------|---------------------------------|
| 1. タケ亜科短細胞珪酸体 (SK 35; 2) | 2. タケ亜科短細胞珪酸体 (SK 13; 第4層) |
| 3. タケ亜科短細胞珪酸体 (SK 01; 最下層) | 4. タケ亜科短細胞珪酸体 (SK 07; 第5層) |
| 5. ヨシ属短細胞珪酸体 (SK 01; 最下層) | 6. ヨシ属短細胞珪酸体 (SK 13; 第4層) |
| 7. ヨシ属短細胞珪酸体 (SK 07; 第5層) | 8. ヨシ属微動細胞珪酸体 (SK 35; 2) |
| 9. ススキ属短細胞珪酸体 (SK 13; 第4層) | 10. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (SK 01; 最下層) |
| 11. タケ亜科微動細胞珪酸体 (SK 35; 2) | 12. タケ亜科微動細胞珪酸体 (SK 01; 最下層) |
| 13. ウシクサ族微動細胞珪酸体 (SK 35; 2) | 14. ヨシ属微動細胞珪酸体 (SK 01; 最下層) |
| 15. ヨシ属微動細胞珪酸体 (SK 13; 第4層) | 16. ヨシ属微動細胞珪酸体 (SK 35; 2) |

VI まとめ

今回の調査では、堅穴住居や溝、土壌や多数のピットなど、弥生時代中期前半頃を中心とした遺構を検出した。中でも、取水土壌という名称設定を行った土壌群の検出や、稲秆や豆類の痕跡が残る圧痕土器の発見は、当該遺跡の性格を考える上で、非常に重要であると考えた。

以下では、取水土壌の形態や使用時の状況、及び、圧痕土器出土の背景について、わずかばかり記述してみたい。

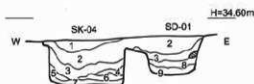
1, 取水土壌について

調査区内において、合計19基を検出した。全てSD-01に接続又は隣接しており、SD-01の水流を利用した施設である事を示唆している。土壌床面には一部に鉄分の著しい沈着が認められる事から、土壌掘削後、水流が始まるまでの間に若干の時間差が考えられる。しかし程なく水流が開始したのもと思われる、大半の土壌の下層堆積土としてシルト状の灰色細砂、または、砂質気味の黒灰色粘質土が認められる。これらの事実は、SD-01内の水流が開始される時期を当初から認識し、その時期に先立って土壌の掘削を開始した、と考える事が妥当と思われる。

これは、土壌群がほぼ同時に、または非常に短い期間の中で一斉に掘削された事を示している。

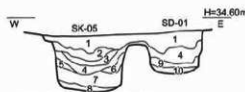
SD-01を含むこれら土壌群からは少量の土器しか出土していないが、そのなかには頸部下に一条の沈線を描き、口縁部突帯上面を水平に仕上げる亀甲タイプ終末頃に出現する甕や、厚い断面三角形の突帯を口縁端に貼り付ける甕、大きく外側に張り出し上面を垂下させ、頸部下に断面三角形の胴部突帯を貼る甕などの一群があり、板付Ⅱ式の新段階頃から須玖式の前段階頃、特に土壌群内出土土器にはその傾向が著しく、これらが機能していた時期はこの段階であると考えたい。

土壌群は、SK-35、39の2基を除き、全て調査区中央より南側で検出され、その全てが1~2m程の間隔をおいてひしめきあっている。最も接近しているものは土壌上面間が20cm程しかなく、SB-01の壁面遺存状況から、この周辺における過去の削平状態は弥生時代地表面から50~60cm程カットされて



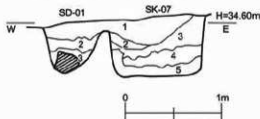
- 1, 黒茶色土
- 2, # (白色砂粒, 黄褐色土ブロックを多く含む)
- 3, # (白色砂粒少ない)
- 4, 黒茶色粘土質
- 5, # (黄褐色土ブロック含む)
- 6, 暗黒灰色粘土 (炭化物多い)
- 7, 淡黒灰色粘質土 (やや砂質気味)
- 8, 暗灰色砂 (やや荒い)
- 9, 暗灰色細砂

第44図 SK-04・SD-01土層断面図 (1/40)



- 1, 黒茶色土 (黄褐色土粒微量混り)
- 2, # (やや粘質, 赤茶色土粒混り, 白色砂粒混り)
- 3, # (黄褐色土ブロック混り)
- 4, 暗黒褐色粘質土 (黄褐色土ブロック, 白色砂粒混り)
- 5, # (黄褐色土ブロック混り)
- 6, # (黄褐色土ブロック混り)
- 7, 淡灰色土 (鉄分, 黄褐色土ブロック混り)
- 8, # (地山混り)
- 9, 暗灰色土 (やや粗く, 黄褐色土ブロック混り)
- 10, 灰色粘土質土 (地山混り)

第45図 SK-05・SD-01土層断面図 (1/40)



- 1, 黒茶色土 (白色砂粒混り)
- 2, # (1よりやや濃い, 黄褐色土をわずかに含む)
- 3, 黒茶色粘土質 (黄褐色土含む)
- 4, 黒茶色砂質土 (多量の黄褐色土ブロックを含む)
- 5, 黒色土

第46図 SK-07・SD-01土層断面図 (1/40)

いると思われ、現検出面における20cmの間隔は、弥生時代中期頃の地表面では限りなく接続に近い接近であったと思われる。現に遺存状況の良好なSK-35、39は現検出面でも5cm程の間隔で接近しており、これを裏づけている。

平面プランや土壌の深さ等に関しては、各個体に若干の差が認められるものの、正方形や隅丸長方形を基調として、深さは0.3m～0.8mの範囲内で収まっている。

土壌群は、それぞれの形態から大きくA～Cの3タイプに分類が可能である。

A類・・・比較的規模が大きく、取排水口が一穴で、その口幅が土壌短辺の1/2またはそれ以上を占めるもの。

(例：SK-02、03等)

B類・・・A類と比べやや規模が小形化する。取排水口は一穴で、口幅が土壌短辺の1/2以下または1/3程のもの。

(例：SK-07、16等)

C類・・・大形のものと小形のものがある。取排水口は二穴で、一部に排水口側がトンネル状に穿た

表1 取水土壌一覧表

(単位：メートル)

遺構名	性格	分類	規模(縦×横×深さ)	備考
SK-02	土壌	A	1.4×1.4×0.8	
03	土壌	A	1.6×1.3×0.8	初圧痕土器 板状痕跡
04	土壌	A	1.2×1.0×0.45	
05	土壌	C	1.1×1.0×0.6	
06	土壌	A	1.2×1.05×0.4	
07	土壌	B	1.2×0.8×0.7	
08	土壌	A	1.1×0.9×0.7	
09	土壌		1.2×1.1×0.3	
10	土壌	C	1.05×0.95×0.5	
11	土壌	C	1.0×0.8×0.5	
12	土壌	C	1.0×0.8×0.6	
13	土壌		1.0×0.8×0.6	
14	土壌	C	1.3×1.1×0.3	SP01とリンク 黒曜石原石
15	土壌		1.2×1.1×0.5	
16	土壌	B	0.9×0.8×0.9	
21	土壌		0.8×0.7×0.5	
22	土壌	B	0.9×0.7×0.3	
35	土壌	C	1.4×1.1×0.7	
39	土壌	C	1.4×1.15×0.8	壺(墳底に1個体)
SP-01	小ビット		直径0.6	断面すり鉢形

れるもの。

(例：SK-05, 10等)

A類に該当するものとして、SK-02, 03, 04, 06, 08がある。SK-08を除き、その全てが調査区中央部に寄り沿うかの如く接近している。SK-03の底面には矢板状の木材を打ち込んだ痕跡があり、貯水又は貯蔵に供する為の施設と考えられ興味深い。

B類は、いわばA類の小形版で非常に類似性豊かで、これに該当するものとして、SK-07, 16, 22がある。やや散在している感はあるが、SK-22以外の2基はそれぞれA類の土壌に隣接しており、関係の深さを示している。

C類に該当するものとしてSK-05, 10, 11, 12, 14, 35, 39の7基があり、分類中最多のグループである。分布は、調査区の北端側に一群(SK-35, 39)、南端側に一群(SK-10, 11, 12, 14)があり、北端の群は2基が異常に接近しており、規模も大きく、平面プランは楕円形を呈している。南端の群は4基が寄り沿うかの如く接近しており、構成の形態はA類に類似している。しかし規模は相対的に小さく、A類最大のものと比べ容積比は1:4程である。北端群と南端群の共通要素は楕円形プランで、異なる群中に同じ要素を持つ土壌が存在する事は、土壌間の時期的な同時性に由来するものと考えられる。

表2 竪穴住居一覧表

遺 構 名	性 格	規 模	備 考
SB-01	円形竪穴住居	直径7~7.6m 深さ0.3m	主柱4 支柱2
02	円形竪穴住居	直径5.6m+α	主柱10
03	方形竪穴住居?	3.2m×2.0m	

以上、A~C類を概観したが、いずれのグループにも共通して言える事は2~4基の土壌を1つの単位として存在している事である。B類に関しては、A類の範疇に入るものとして考える方が妥当性があると思われるが、いずれにしてもA・B類中に少なくとも3単位、C類中に少なくとも2単位が存在している。これをSD-01に沿ってあてはめてみると、北側に1単位、南側に少なくとも4単位ある事になる。

やや乱暴な論ではあるが、A類であるSK-08を中心とした東西の対照位置にSB-01とSB-02が存在している。SB-01は主柱4本に2本の支柱を持つ6本柱の建物であり、SB-02は中央の炉を中心に10本の主柱を同心円状に配置する構造の建物である。相異なる構造の2軒の竪穴住居に付属するかの様に、SK-35, 39を除く土壌群もSK-08以北のA・B類、以南のC類(以南にはA~C類に分類出来なかったものが4基あるが、SK-09を除き、形態や規模、グループ属性の特徴などからC類に属するものと考えられる。)に分ける事が可能で、以上の推定が正しければ1軒の竪穴住居で2~3単位、7~8基の土壌を管理していた事になる。各土壌、及び、竪穴住居からの出土遺物にあまり時期差が見られない事から、機能差による単位構成と考えたいが、Vの分析結果を見てもその差が認められない為、今回の調査分においては土器の形式差よりも短い時間中での時期差に由来するものとして捉えたい。また、SD-01の北端にC類の一群が存在しているところから、同時期の竪穴住居が調査区外に少なくとも1軒以上存在しているものと考えられる。

2. 圧痕土器について

SK-03の土壌底面から、外底面に粉の圧痕が残されている壺の底部破片が出土した。稲穂の圧痕と思われ、その寸法は長さ7mm、幅4mm、長幅比1.75を測る。いわゆるジャポニカ種に属する短粒米である。八女市内での遺跡から出土している稲作関連の遺物は古くから確認されており、弥生時代前期後半の亀ノ甲遺跡や、中期の岩崎遺跡から炭化米が出土している。炭化米や圧痕土器は出土していないが、八女の西部地区に立野・大坪遺跡があり、古いタイプの貯蔵穴や楕円形の二重環壕から石包丁などの関連遺物が出土しており、八女地方での稲作開始期は遅くとも弥生時代前期中頃～後半頃に比定出来ると思われる。

今回出土した圧痕土器そのものは弥生時代中期前半頃に比定出来、開始期からは相当な時間的経過があるため、稲作そのものは既に定着・発展の時期にあたっていると思われる。しかし、ここで注目しなければならないのは、SK-03に直に接続しているSD-01から種子（マメ科？）の圧痕土器が出土した事である。種子の圧痕の寸法は直径約9mm程で、楕円形を呈している。現在栽培されているマメ科等の種子と合致するものが筆者の力量不足で見い出す事が出来なかった為、現在のところ未同定である。

大事な点は、稲穂圧痕土器と種子圧痕土器が共にリンクし、同時期の所産と思われる遺構から出土した事である。通常、稲作の開始期には水田作物と畑作物に由来する遺物が混在気味に出土する事があり、これらは水田と畑地の未分化が主な要因と考えられている。しかし、これらは時間的な経過と共に薄らいでゆき、発展期には水田と畑地は明確に分化すると理解されている。今回同時に出土した2点の圧痕土器は、弥生時代中期前半頃の八女地方では、明確な水田と畑地との分化が浸透していない事を示唆している。前述した取水土壌群の存在と考えあわせて、中期前半頃の八女地方における農業の形態は、水田経営に大きくウェイトが持たれつつも、前代的な畑作物の栽培や堅果類の採集も引き続き根強く残っていたものと推定される。異なる話になるが、北部九州の弥生式土器を代表する板付Ⅱ式土器や須玖式土器の時代になっても、八女地方では中期前半頃まで縄文系の突帯文土器も根強く製作し続けるところに共通性が垣間見られると考えたいが、浅学な筆者の思い違いであろうか。御批判を賜りたい。

なお、八女市内出土の炭化米及び圧痕土器（現時点での管見分）を一覧表でまとめてみた。何かの折、参照されたい。

表3 八女市内出土の炭化米及び稲圧痕土器一覧表

調査年	遺跡名	種類	時期	備考
1917年(大正6年)	岩崎遺跡	炭化米	弥生時代中期	中山平次郎 「土器の有無未詳なる石器時代遺跡」
1962年(昭和37年)	亀ノ甲遺跡	炭化米	弥生時代前期～中期	
1985年(昭和60年)	穴反田遺跡	炭化米	弥生時代中期	7号竪穴住居
1991年(平成3年)	石町遺跡	炭化米	弥生時代中期?	
1993年(平成5年)	樋の口遺跡	稲圧痕	古墳時代前半	24号溝
1994年(平成6年)	平田・穴反田遺跡1地点	炭化米	弥生時代中期～後期	4号土壌
1995年(平成7年)	平田・北ノ前遺跡	炭化米	弥生時代中期	9・10号土壌
1999年(平成11年)	高島遺跡2次	稲圧痕	弥生時代中期前半	1号溝
2000年(平成12年)	釘崎1号墳	稲圧痕	古墳時代後期	墳丘上表層

※表中の資料は、平成13年3月現在で確認済のもの。今後、資料増加が予測される。

3, おわりに

発掘調査開始とともに、その存在を現していた取水土壌群。その内容や性格を確認したいが、常に慎重に調査するように心掛けた。しかし、その思いとは裏腹に、性格を的確に指し示すような物証は出土する事なく、ただ時間だけがいたずらに過ぎて行った。現地調査でははっきりと認識出来た事は、いくつかの異なる形態もつものとして分類可能であった事、調査区中央部からSD-01に沿って密集している事、時代は弥生時代中期の前半頃で、ほとんど全てがSD-01と直接につながっていた事、ぐらいだった。用途は何であったのか。どのような使われ方をしていたのであろうか。全てが謎であった。

ただ、前述したように、SD-01から種子圧痕土器が。また、SK-03からは靱圧痕土器が出土した事から、最有力な可能性として、農業及び生活用水としての貯水施設を考えていた。堅果類のアク抜き施設としての可能性は二の次だった。しかし、現地調査終了後、Vで執筆していただいた通り、応用地質株式会社において土壌底面付近より採取した堆積土を分析していただいた。結果は予想外だった。栽培種の植物珪酸体は全く検出されず、珪藻化石すら見つからない。これは取水土壌群が、取水後の貯水を目的にしていたのではなく、一時的に通水してその後は放置され、乾燥状態が長期間にわたっていた事を示唆していた。

“堅果類のアク抜き”と断定は出来ないが、それに準ずる機能を有していた事は想定しても良いのではないだろうか。

高島の弥生人は、日々生きぬく為に必死の努力をしていたのだらうと思う。稲作をし、畑作も行い、それでも足りずに採集もした。そんな姿が想像出来る。

1日、1日を大切に生き抜いた先人達に敬意を払いながら、この場所に21世紀を代表する総合病院が完成し、地域医療に貢献される事に期待しつつ、稚拙なおわりとしたい。



川崎病院現病棟（2001年3月 移転前全景）



完成間近の新病棟 (高島遺跡2次調査地点)



南西側から見たビハーラ光風と川崎病院新病棟

(手前：高島遺跡 1 次調査地点)
(奥：高島遺跡 2 次調査地点)

PLATES

凡 例

出土遺物に関するPL右下の番号、及び、
名称は以下の要領となっている。



出土遺構番号

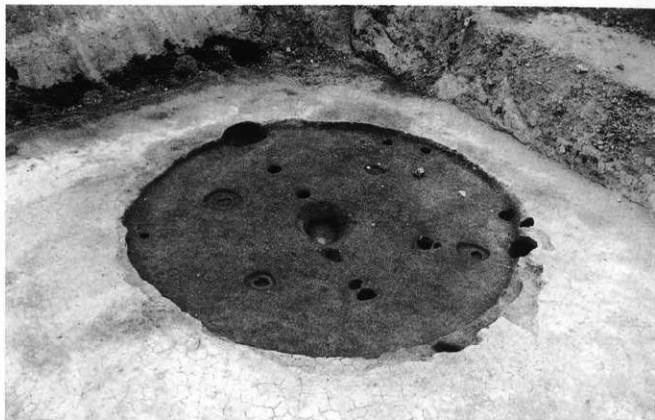
挿図番号、又は、遺物名



1. 高島遺跡（2次調査）発掘調査前風景（南東より）



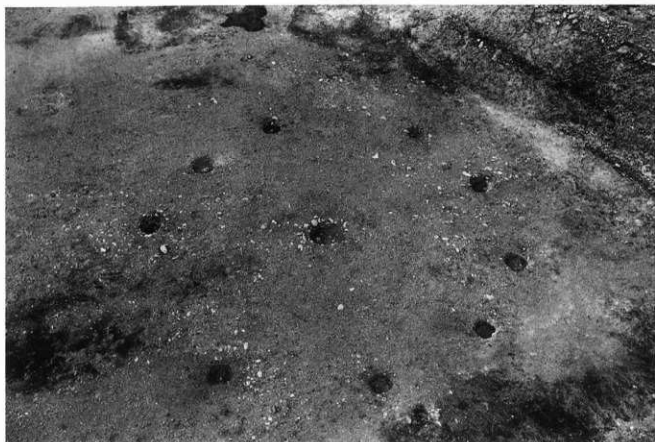
2. 高島遺跡（2次調査）第1期調査区全景



1. SB-01 全景（北東より）



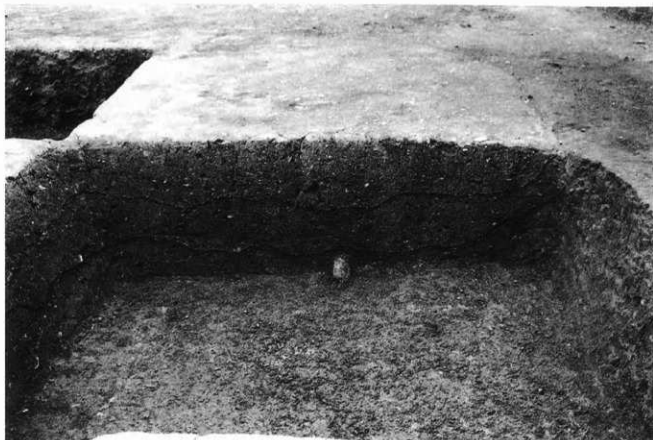
2. SB-01 主柱穴検出時埋土状況（南より）



1. SB-02 全景 (南より)



2. SB-03 全景 (南東より)



1. SB-03 土層断面 (北より)



2. SB-03 土層断面 (南より)



1. SD-01と取水土壌群



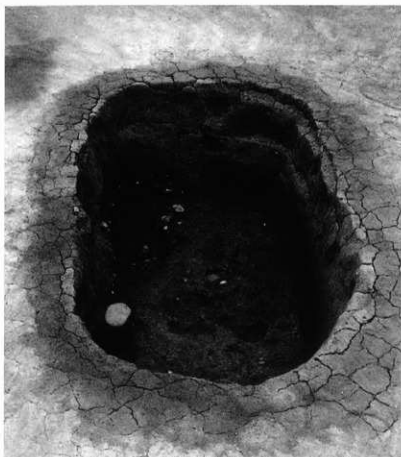
2. SD-01 土層断面（南より）



1. SD-02 全景 (東より)



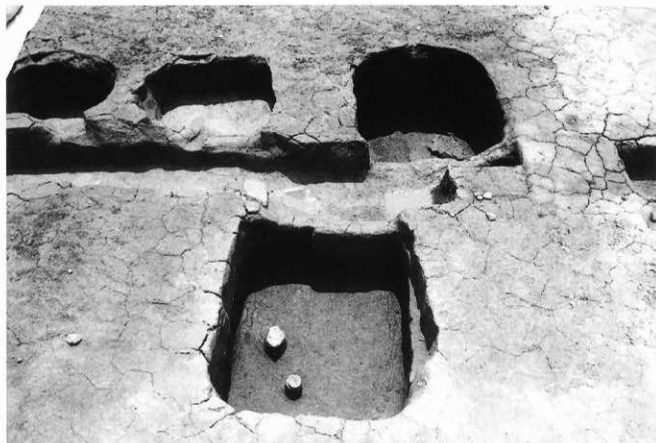
2. SD-02 土層断面 (東より)



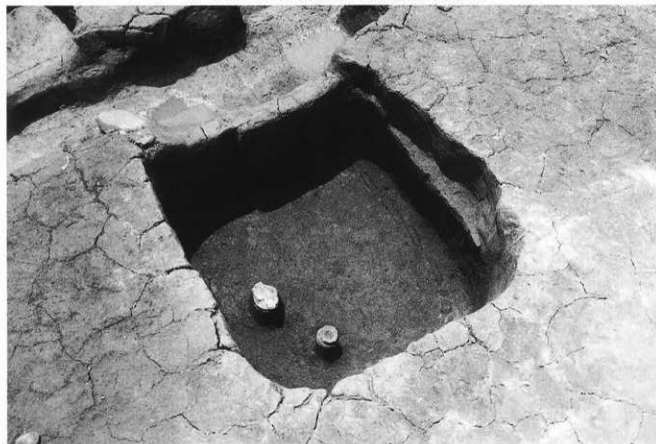
1. SK-01 (貯蔵穴状土坑) 全景 (北より)



2. SK-01 南辺 挟り部分



1. SK-02,03,04,05,完掘状況(東より)



2. SK-03 板状痕跡



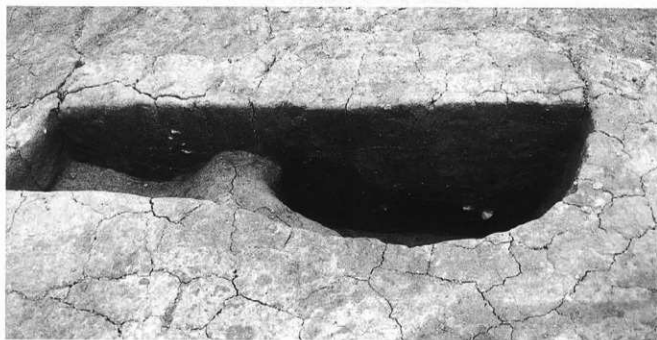
1. SD-01内石材とSK-03(奥),04(手前)



2. SK-05 トンネル状排水口



1. SD-01内石材とSK-07 (西より)



2. SD-01~SK-08 土層断面 (南より)



1. SD-01とSK-08



2. SK-12 排水口掘削前状況（東より）



1. SK-14 土層断面（南より）



2. SK-16 検出状況（南西より）



1. SK-35.39 状況 (南より)



2. SK-35 止水用石材検出状況



1. SK-39内 土器出土状況



2. SK-17 床面検出状況 (東より)



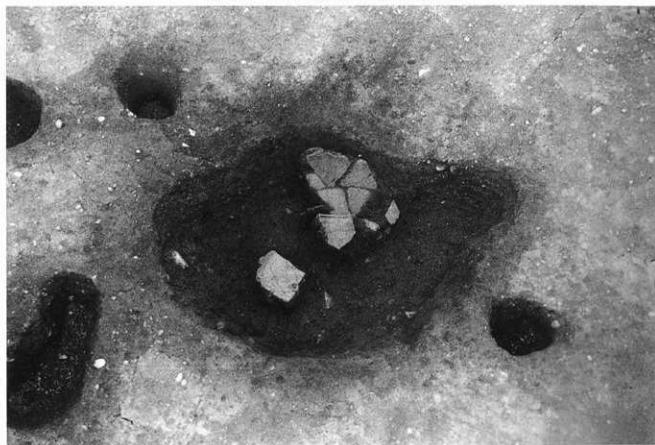
1. SK-34 完掘状況 (北東より)



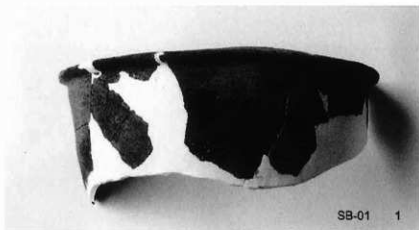
2. SK-34 土層断面 (南より)



1. SP-02 砥石出土状況（南東より）



2. SP-53 土器出土状況（南より）



SB-01、SD-01 出土遺物



SD-01 12



SD-01 14



SD-01 17



SD-01 18



SD-01 石器 1・2

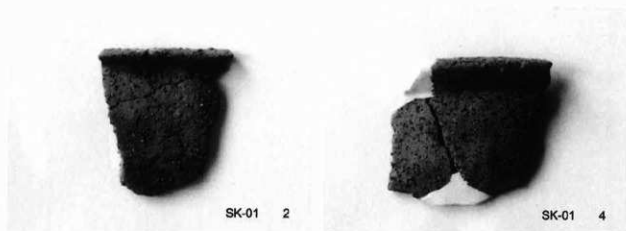


SD-02 1



SD-02 2

SD-01、SD-02 出土遺物



貯蔵穴状土塊 (SK-01)、取水土塊 (SK-03) 出土遺物



SK-03 1



SK-03 2



SK-04 4



SK-14 黑曜石原石



SK-39 6



SK-39 7

取水土壤 (SK-03、04、14、39) 出土遺物



SK-17 砥石

その他の土壌 出土遺物



管状土製品

その他の遺物



SP-02 砥石

ビット (SP) 出土遺物



SP-53 2

報告書抄録

ふりがな	たかしまいせき						
書名	高島遺跡(2次調査)						
副書名	福岡県八女市大字津江字高島所在遺跡の調査報告						
巻次	第2分冊						
シリーズ名	八女市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第63集						
編著者名	大塚恵治						
編集機関	八女市教育委員会						
所在地	834-8585 福岡県八女市大字本町647 TEL 0943-23-1982						
発行年月日	西暦 2001年3月30日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村：遺跡番号	北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
たかしま 高島遺跡 (2次調査)	ふくおかけん 福岡県 やめし つかのえ 八女市大字津江 たかしま 字高島	402109	33°12'40"	130°34'35"	19990420 ～19991114	3,200㎡	病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
高島遺跡	集落跡	弥生時代中期 古墳時代後期	竪穴住居、溝 取水土塼、土塼 ピット	弥生式土器 須恵器 土師器 石器	初の圧痕土器、及び 種子の圧痕土器の出土 取水土塼の検出		

高 島 遺 跡 (2 次 調 査)
八女市文化財調査報告書
第63集

平成13年3月30日

発 行 八女市教育委員会
八女市大字本町647
印 刷 (資)東兄弟印刷所
八女市祈禱院563